

1. 加西市の歴史文化の成り立ち

1-1. 社会環境

(1) 位置

加西市は、兵庫県の播州平野のほぼ中央に位置し、東は小野市および加東市に、西は姫路市および福崎町に、南は加古川市に、そして北は西脇市、多可町および市川町にそれぞれ隣接する。市域面積は150.22 km²で、兵庫県の約1.8%を占めており、東西12.4 km、南北19.8 kmの広がりを持つ（図1-1-1参照）。

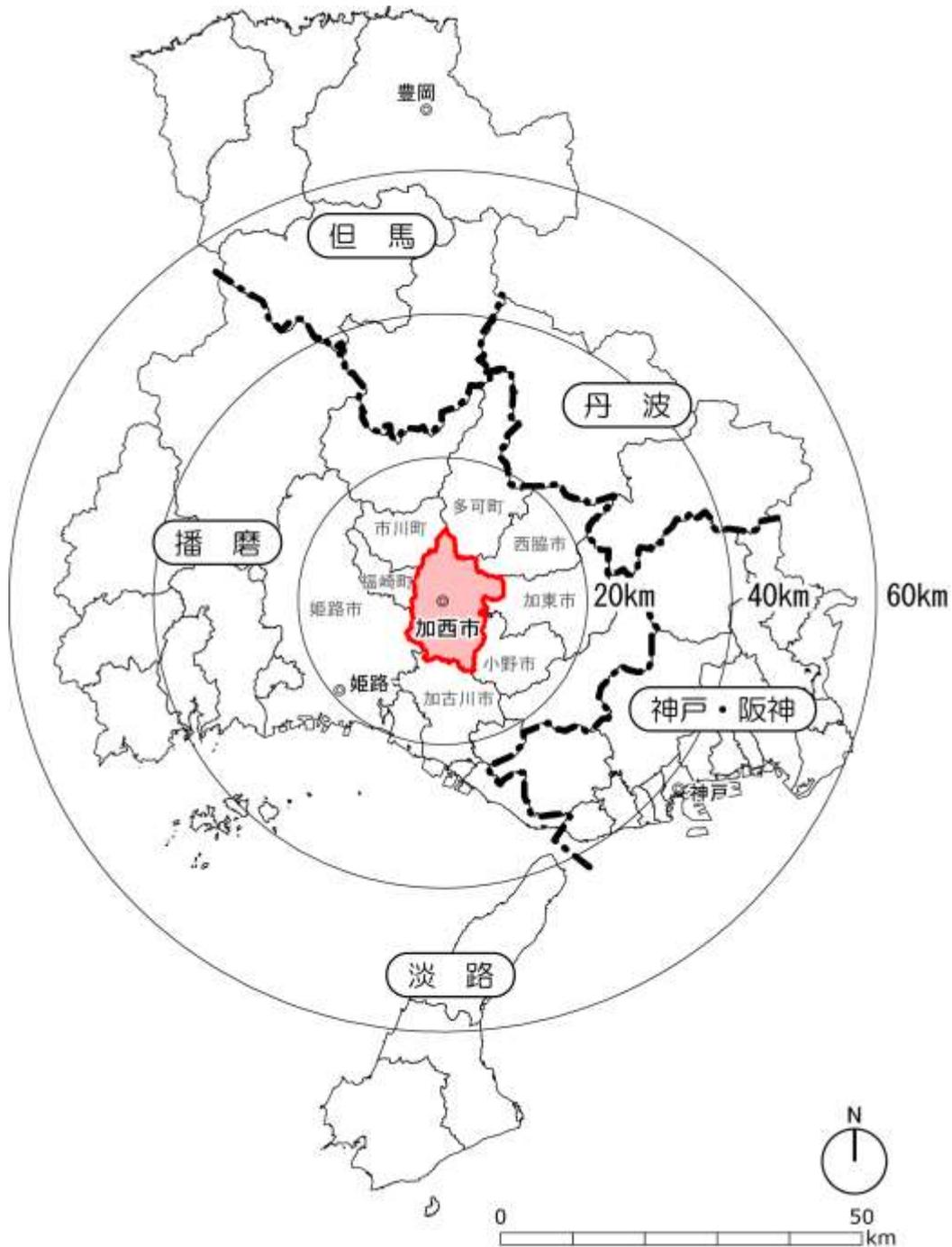


図1-1-1 加西市の位置

(2) 人口・世帯数等

本市の人口は、近年減少を続けており、平成 20 年 (2008) から平成 30 年 (2018) の 10 年間で、5,025 人減少して 44,524 人となっている。一方、世帯数はゆるやかに増加し続けており、核家族や単身家族の増加がうかがえる。なお、国立社会保障・人口問題研究所によると、令和 27 年 (2045) には 30,705 人に減少すると推計されている (図 1-1-2 参照)。

地区別人口をみると、平成 30 年 (2018) 時点で本市の中心市街地を含む北条地区は人口が増加しているが、その他の地区は人口減少傾向にある。一方、世帯数でみると、市城南西部の下里地区および市域北部の西在田地区、在田地区では、世帯数が減少している (表 1-1-1 参照)。

年齢別の人口では、年少人口 (15 歳未満) 及び生産年齢人口 (15~64 歳) の割合が減少する一方、老年人口 (65 歳以上) の割合が増加し続け、平成 30 年 (2018) には、高齢化率 31.6%となっている (図 1-1-3 参照)。



図 1-1-2 人口・世帯数の推移 (住民基本台帳に基づく世帯と人口の推移) ※各年 3 月 31 日現在
(将来推計人口：国立社会保障・人口問題研究所 (平成 30 年推計値))

表 1-1-1 地区別の人口・世帯数の推移 (「国勢調査結果」(総務省統計局) より作成 ※各年 10 月 1 日現在)

地区名	人口 (人)			世帯数 (世帯)			世帯規模 (人/世帯)	
	平成 25 年	平成 30 年	増減率 (%)	平成 25 年	平成 30 年	増減率 (%)	平成 25 年	平成 30 年
北条地区	13,133	13,204	0.5	5,236	5,672	8.3	2.51	2.33
富田地区	3,206	3,089	▲3.6	1,151	1,194	3.7	2.79	2.59
賀茂地区	3,507	3,271	▲6.7	1,218	1,256	3.1	2.88	2.60
下里地区	5,052	4,727	▲6.4	1,835	1,831	▲0.2	2.75	2.58
九会地区	6,675	6,266	▲6.1	2,418	2,462	1.8	2.76	2.55
富合地区	4,046	3,816	▲5.7	1,422	1,473	3.6	2.85	2.59
多可野地区	4,637	4,272	▲7.9	1,641	1,645	0.2	2.83	2.60
西在田地区	2,273	2,072	▲8.8	773	764	▲1.2	2.94	2.71
在田地区	4,143	3,805	▲8.2	1,460	1,453	▲0.5	2.84	2.62
総数	46,672	44,524	▲4.6	17,072	17,750	4.0	2.73	2.51

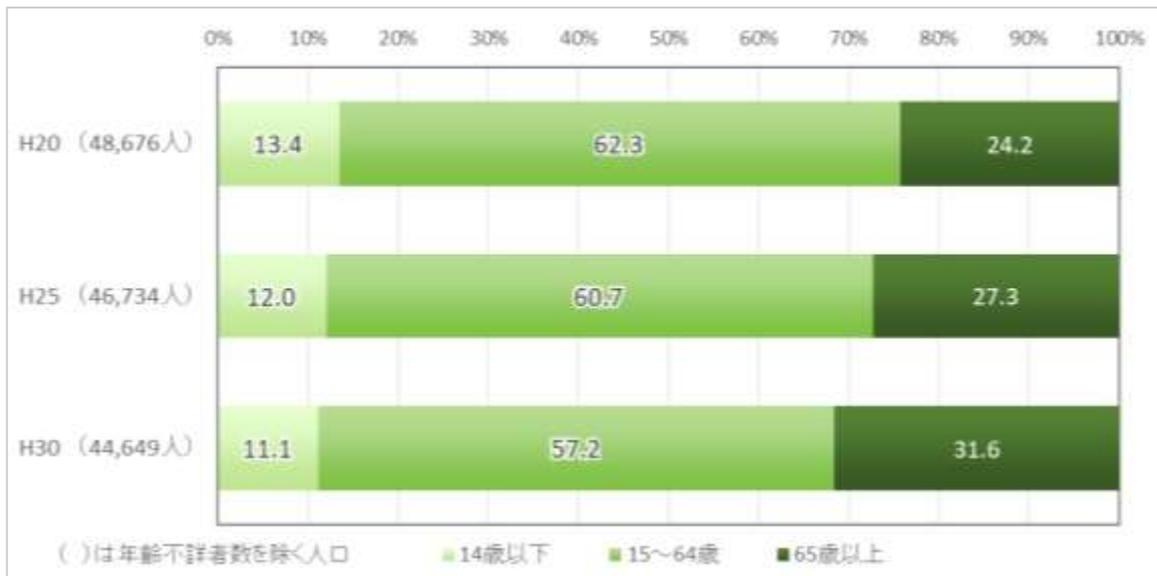


図 1-1-3 年齢別人口の推移

(総務省統計局(住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数調査) ※H20、H25は3月31日現在、H30は1月1日現在)

(3) 行政単位の変遷と集落

明治22年(1889)に市町村制施行によって、加西郡は、北条町、富田村、賀茂村、下里村、九会村、とみあい たかの富合村、多加野村、西在田村、在田村、ほうた やまと芳田村、大和村の1町10村に再編成された。町村合併促進法制定後の昭和29年(1954)に、いづみちよう芳田村は西脇市、大和村は八千代町に合併後、昭和30年(1955)1月15日に、北条町、富田村、賀茂村、下里村の1町3村が合併し北条町となった。次いで、3月1日には多加野村、西在田村、在田村の3村が合併して泉町となり、3月30日には九会村、富合村の2村が合併し加西町となった。そして、昭和42年(1967)4月1日に、北条町、泉町、加西町の3町が合併し、加西市が誕生、兵庫県下で21番目に市制を施行し、現在に至る(表1-1-2、図1-1-4参照)。

表 1-1-2 行政単位の変遷

明治22年 (1889)		昭和30年 (1955)	昭和42年～現在 (1967)
加西郡	北条町	北条町	北条地区
	富田村		富田地区
	賀茂村		賀茂地区
	下里村		下里地区
	九会村	加西町	九会地区
	富合村		富合地区
	多加野村	泉町	多加野地区
	西在田村		西在田地区
	在田村		在田地区
	芳田村	※ 昭和29年(1954)に西脇市に合併	
大和村	※ 昭和29年(1954)に八千代町(現多可町)に合併		



図 1-1-4 昭和30年の町域と現在の地区

(4) 土地利用

本市の土地利用特性は、北条地区を中心とした一部市街地を除いて、市域の大半が農村的な土地利用形態を有している。市域の28%を占める山林が北部山岳地帯を形成し、26%（うち田23%、畑3%）を占める農用地については、土地基盤整備が進み、優良農地の維持・保全が図られている。また、宅地は8%であるほか、その他（公園、ゴルフ場、未利用地等）は34%となっている（図1-1-5、図1-1-6参照）。

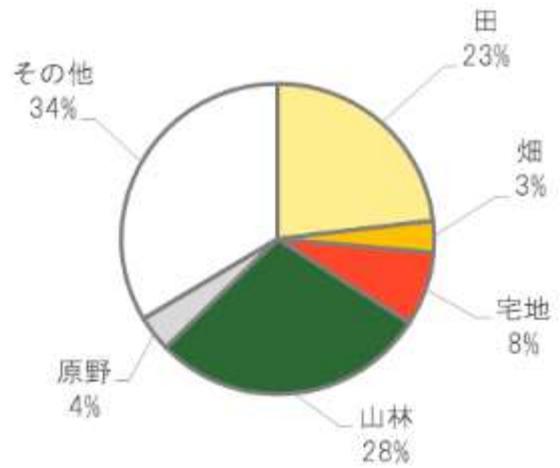
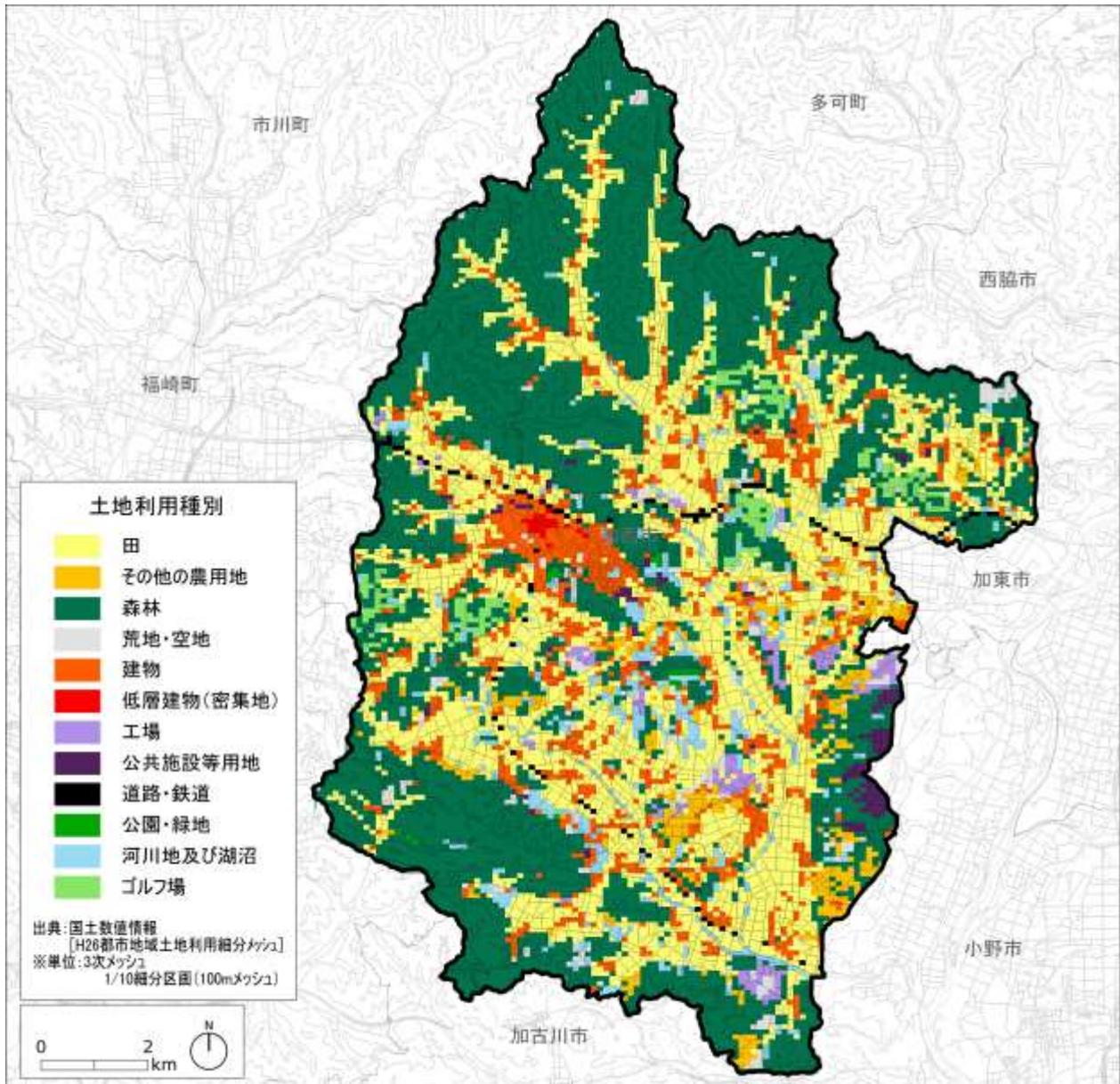


図1-1-5 地目別面積の割合（平成28年）



※ ベース図は、国土地理院基盤地図情報 1/25,000（兵庫県）による。（以下、本構想全体において同様）

図1-1-6 土地利用

(5) 産業

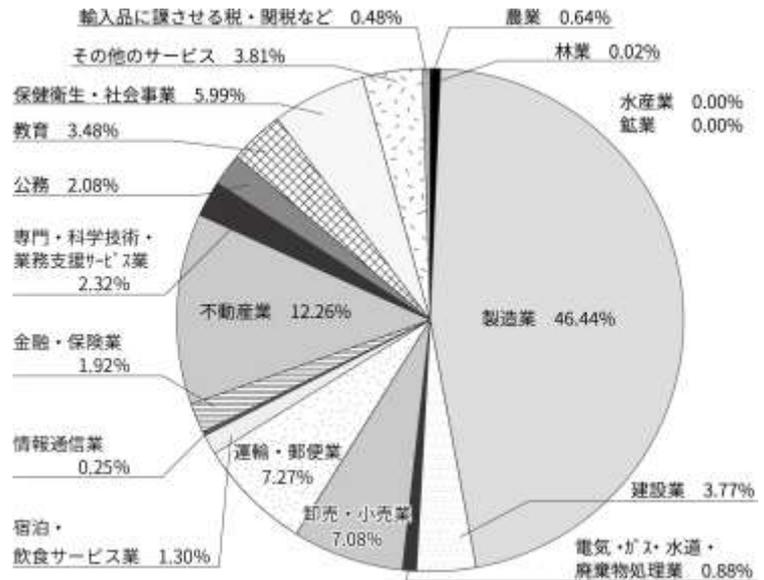
本市の主要な産業は、製造業、農業を中心とした「ものづくり」である。本市は、戦後、三洋電機が創業し、関連した地場の産業が興ってきた。それにより製造業が盛んになり、当時からの協力企業が独自の発展を遂げ、高い技術力や蓄積されたノウハウを持つ企業が集積し、市内経済や雇用を牽引する産業となっている。また、気候条件がよく、広大で優良な農地が広がる本市では、農業も盛んであり、米、トマトなどの野菜、ブドウやイチゴなどの果樹、花卉などを産している。農業関係の教育・研究機関も集積し、平成27年(2015)からは、トマト栽培でオランダ型の次世代施設園芸事業を開始するなど、地域に根ざした新しい農業の創造に取り組んでいる。

平成28年度の市内総生産の構成をみると、製造業の割合が圧倒的に高く、市内総生産の46.44%を占める。次いで、不動産業12.26%、運輸・郵便業7.27%、卸売・小売業7.08%、保健衛生・社会事業5.99%の順となっている(図1-1-7参照)。

平成27年(2015)の産業別就業者数比率は、第3次産業が53.2%、第2次産業が42.9%であり、第2次・第3次産業が大半を占め、第1次産業は3.9%とわずかである(図1-1-8参照)。

平成27年(2015)の「農林業センサス」によれば、本市の農家数は3,288戸で、そのうち自給的農家が1,052戸、販売農家が2,236戸である。また販売農家については、専業農家が381戸、第1種兼業農家が173戸、第2種兼業農家が1,682戸であり、経営規模別では、0.5ha未満は532戸、0.5~1.0haは1,044戸、1.0~2.0haは508戸、2.0~3.0haは78戸、3.0ha以上は74戸となっている。農業経営体による販売目的の作物別作付面積は、水稻が1,639haと最も多く、豆類35ha、露地の野菜類31haと続いている。一方、林業経営体は23経営体で、うち法人化しているものが5経営体、法人化していないものが18経営体である。

本市への観光入込客数は、平成30年度で920,558人である。平成25年度の「根日女の湯」(民間施設)の閉鎖や平成29年度の「いこいの村はりま」の改修工事などが影響して観光入込客数が減少している年もあるが、全体としては微増傾向にある。最も入込客数が多い施設は、「兵庫県立フラワーセンター」で年間20万人を超える。同敷地内には、平成29年(2017)4月に、「古代鏡展示館」(兵庫県立考古博物館加西分館)が開館し、入込客数がさらに増加している(表1-1-3、図1-1-9参照)。



(「兵庫県市町民経済計算(平成28年度)」より作成)

図1-1-7 市内総生産の構成(平成28年度)



(「国勢調査結果」(総務省統計局)より作成 ※各年10月1日現在)

図1-1-8 産業別就業者数比率の推移

表 1-1-3 観光入込客数の推移 (加西市資料より作成) (単位: 人/年)

主な観光地点等	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	H28 年度	H29 年度	H30 年度
法華山一乗寺	95,000	95,000	79,000	45,214	45,501	43,859	45,654	53,833
五百羅漢	10,266	8,855	8,579	11,037	10,478	10,202	10,584	10,004
玉丘史跡公園	29,740	34,230	30,257	35,458	48,780	31,553	36,160	37,690
根日女の湯	98,893	93,602	47,701	—	—	—	—	—
いこいの村はりま	59,197	50,564	50,908	51,019	54,586	55,862	10,644	58,863
兵庫県立フラワーセンター	168,961	193,552	223,496	225,057	213,819	225,672	227,918	236,106
丸山総合公園	21,716	23,225	20,282	19,039	16,492	22,858	27,962	28,664
古法華自然公園	42,760	46,980	34,840	48,086	68,115	62,646	64,168	83,362
NPO 法人原始人の会 都市農村交流施設	7,285	9,897	10,866	10,455	13,839	16,776	14,214	16,617
青野運動公苑	72,926	69,987	69,797	70,390	67,621	68,138	82,249	78,760
勤労者体育センター	—	—	69,069	84,629	79,118	83,896	86,308	86,848
加西カントリークラブ	55,465	57,532	59,081	51,438	56,681	56,897	57,145	56,389
タカガワオーセントゴルフ倶楽部	45,550	43,684	39,164	42,213	45,423	42,149	45,610	46,464
播州東洋ゴルフ倶楽部	26,186	31,269	40,519	40,868	43,610	45,716	45,801	43,294
加西インターカントリークラブ	25,893	25,126	24,675	38,307	29,697	25,902	14,350	18,164
北条節句まつり	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000
かさい夏っ彩夢フェスタ (～H24) 加西サイサイまつり (H25～)	29,000	30,000	23,000	16,000	25,000	25,000	25,000	26,000
北条の宿はくらんかい	18,000	15,000	25,000	28,000	25,000	15,000	1,000	—
グリーンパークトライアスロン	5,000	—	—	—	—	—	—	—
じば産物産展	—	—	8,000	6,500	8,800	9,000	—	7,500
播磨国風土記 1300 年祭	—	—	—	—	14,500	—	—	—
ドリームベースボール	—	—	—	—	—	—	7,000	—
合計	841,838	858,503	894,234	853,710	897,060	871,126	836,767	920,558



図 1-1-9 主な観光施設の分布



加西サイサイまつり



兵庫県立フラワーセンター
(出典: 兵庫県立フラワーセンターホームページ)



古法華自然公園

(6) 交通網

中国自動車道が市内のほぼ中央を東西に横断する形で走り、加西インターチェンジが本市のほぼ中央に整備されている。また、市の南端をかすめるかたちで山陽自動車道が走り、加古川市に位置する加古川北インターチェンジからの市域へのアクセスの利便性も高い。これら2つのインターチェンジを有することで、市内の産業団地には、製造業を中心とする数多くの企業が進出している。

また、市内の道路網は、姫路市から京都を結ぶ国道372号や本市の中心市街地を走る主要地方道三木宍粟線等があり、近隣地域とのアクセスも充実している。これらの国道や主要地方道の多くは、近世の街道や古道を概ね踏襲した道筋である。一方、北条鉄道が市内を運行しており、北条町駅からJR加古川線と連絡する栗生駅（小野市）までを20分程度で結び、北条町駅からJR加古川駅へは50分程度となっている（図1-1-10参照）。

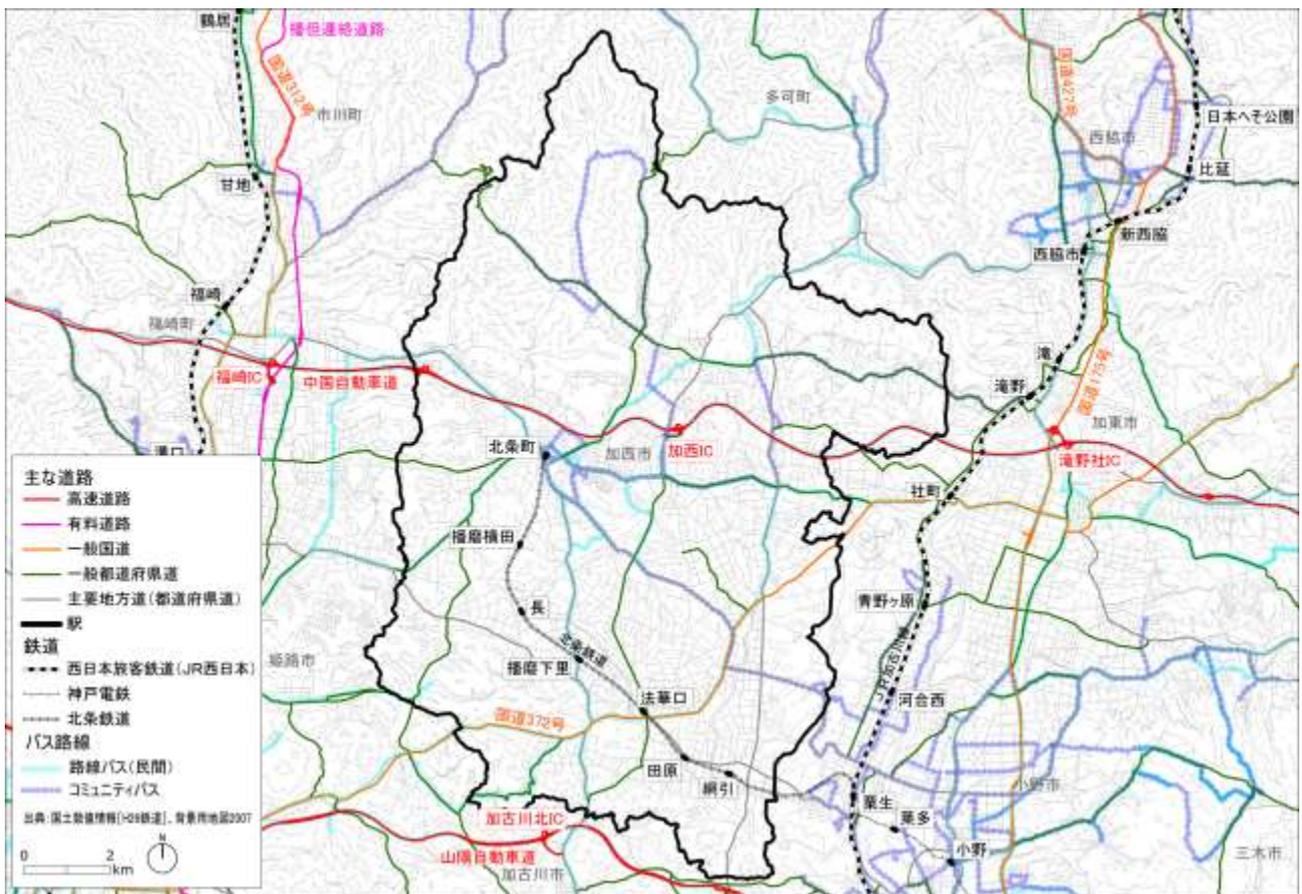


図1-1-10 主要交通網

(7) 法規制等

本市では、行政区域（150.22 km²）のうち、南側の118.0 km²が都市計画区域に指定されている。そのうち、5.0 km²が市街化区域、113.0 km²が市街化調整区域に指定されている。本市のDID（人口集中地区）以外では、中野町と4つの産業団地（加西工業団地、鎮岩工業団地、加西東産業団地、加西南産業団地）が市街化区域に指定されており、中野町では住居系の用途地域、産業団地では工業系の用途地域が指定されている。また、下記の17地区で地区計画が決定されている（図1-1-11参照）。

加西市における地区計画区域

「北条町駅西部地区」「加西南産業団地地区」「加西東産業団地地区」「鎮岩工業団地地区」「中野地区」「玉丘地区」
 「横尾地区」「西高室地区」「倉谷町産業公園地区」「鶉野飛行場跡地地域資源活用地区」「尾崎町北条高校前地区」
 「横尾南部地区」「繁昌町国道372号沿線地区」「東高室次世代へのまちづくり産業立地促進地区」
 「鶉野上町産業集積地区」「鶉野飛行場跡地東部産業拠点地区」「加西インター産業団地地区」

一方、都市計画区域外については、「緑豊かな地域環境の形成に関する条例（緑条例）」（兵庫県）に基づき、平成17年（2005）より環境形成区域が指定され、適切な土地利用の推進や森林・緑地の保全の観点からの開発行為の誘導等によって、緑豊かな地域環境の形成を図っている（図1-1-11参照）。

「農業振興地域の整備に関する法律」では、下里川や万願寺川等河川沿い、谷筋を中心に農業振興地域及び農用地区域が指定されている（図1-1-12参照）。

「森林法」では森林の大半にあたる6,346haが地域森林計画対象民有林であり、国有林はわずか1haにとどまる。また、保安林は1,567haに指定されており、森林面積の24.9%を占める（図1-1-13参照）。

自然公園では、「兵庫県立自然公園条例」に基づく自然公園として、市域南部に「播磨中部丘陵県立自然公園」が指定されている。法華山一乗寺境内及びその周辺には、スギ・ヒノキ・マツ・シイ等の社叢が静寂な境内地を形成している（図1-1-14参照）。

また、「環境の保全と創造に関する条例」（兵庫県）に基づき、「普光寺」の1地区に兵庫県自然環境保全地域が指定されている。

景観行政では、「景観の形成等に関する条例」（兵庫県）に基づき、加西市北条町北条、北条町栗田、北条町横尾、北条町小谷、北条町古坂の各一部を含む約45haの地域が、北条地区歴史的景観形成地区に指定され、地域の特性に応じたきめ細かな景観誘導が図られている（図1-1-15参照）。

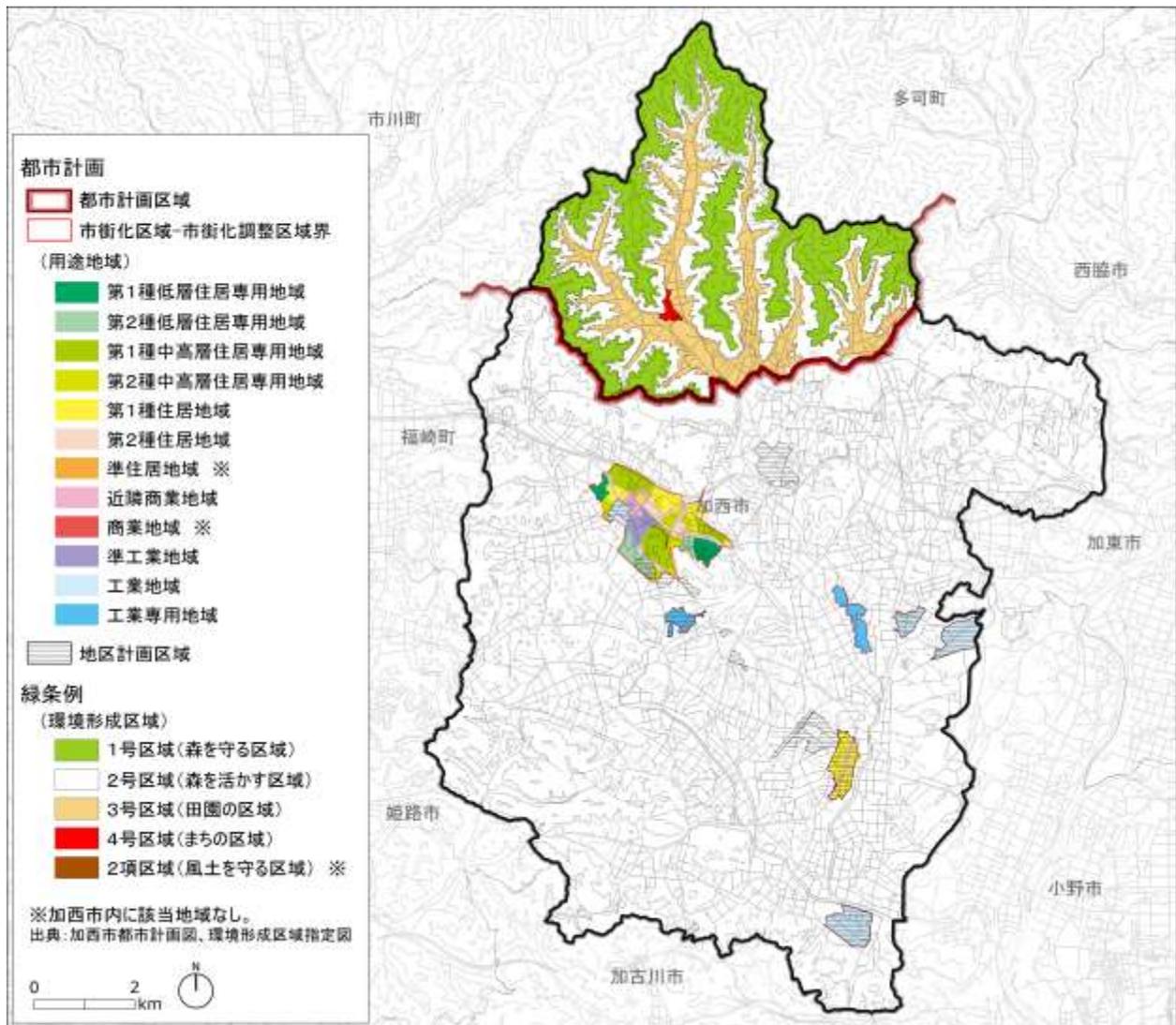


図1-1-11 都市計画法及び緑条例に基づく区域指定

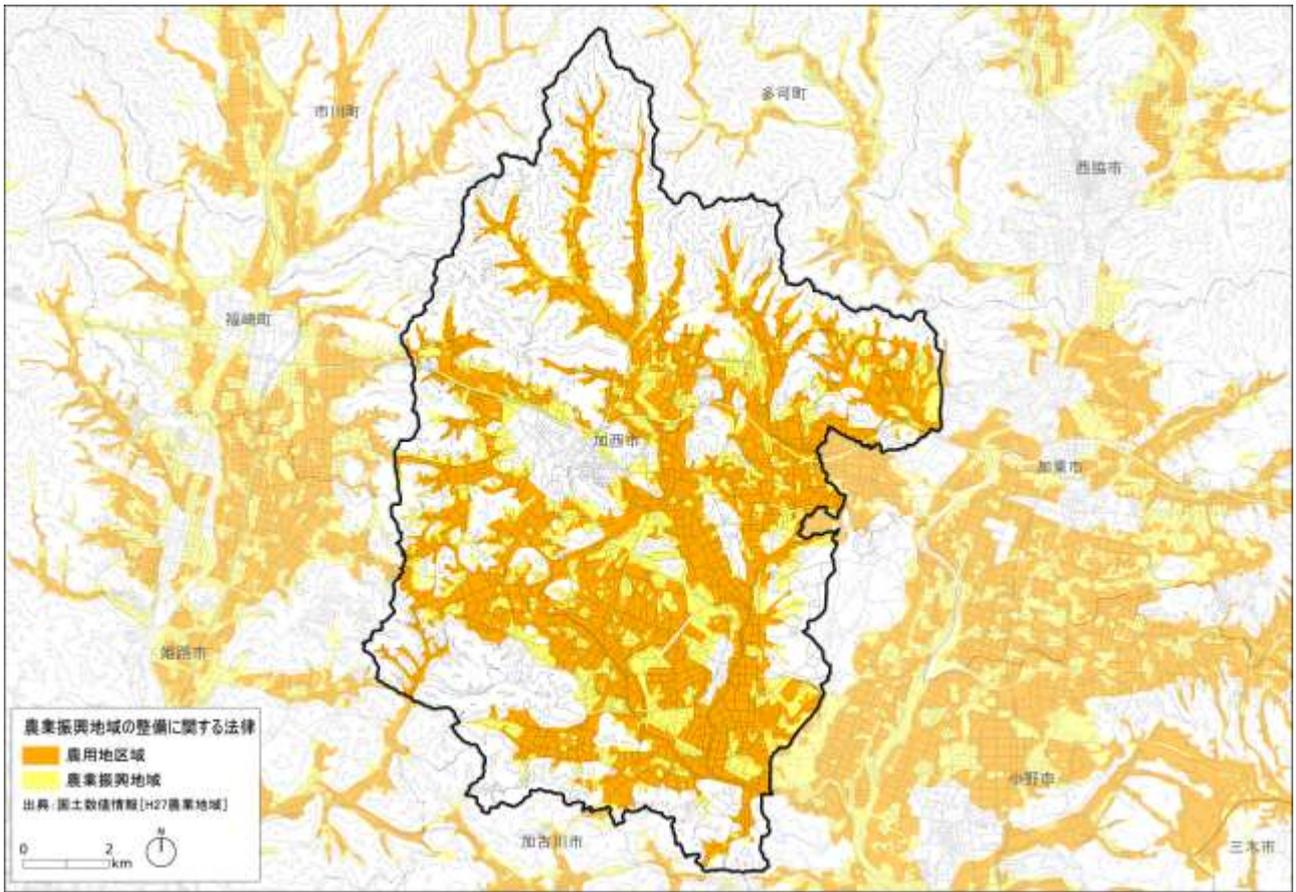


図 1-1-12 農業振興地域の整備に関する法律に基づく区域指定

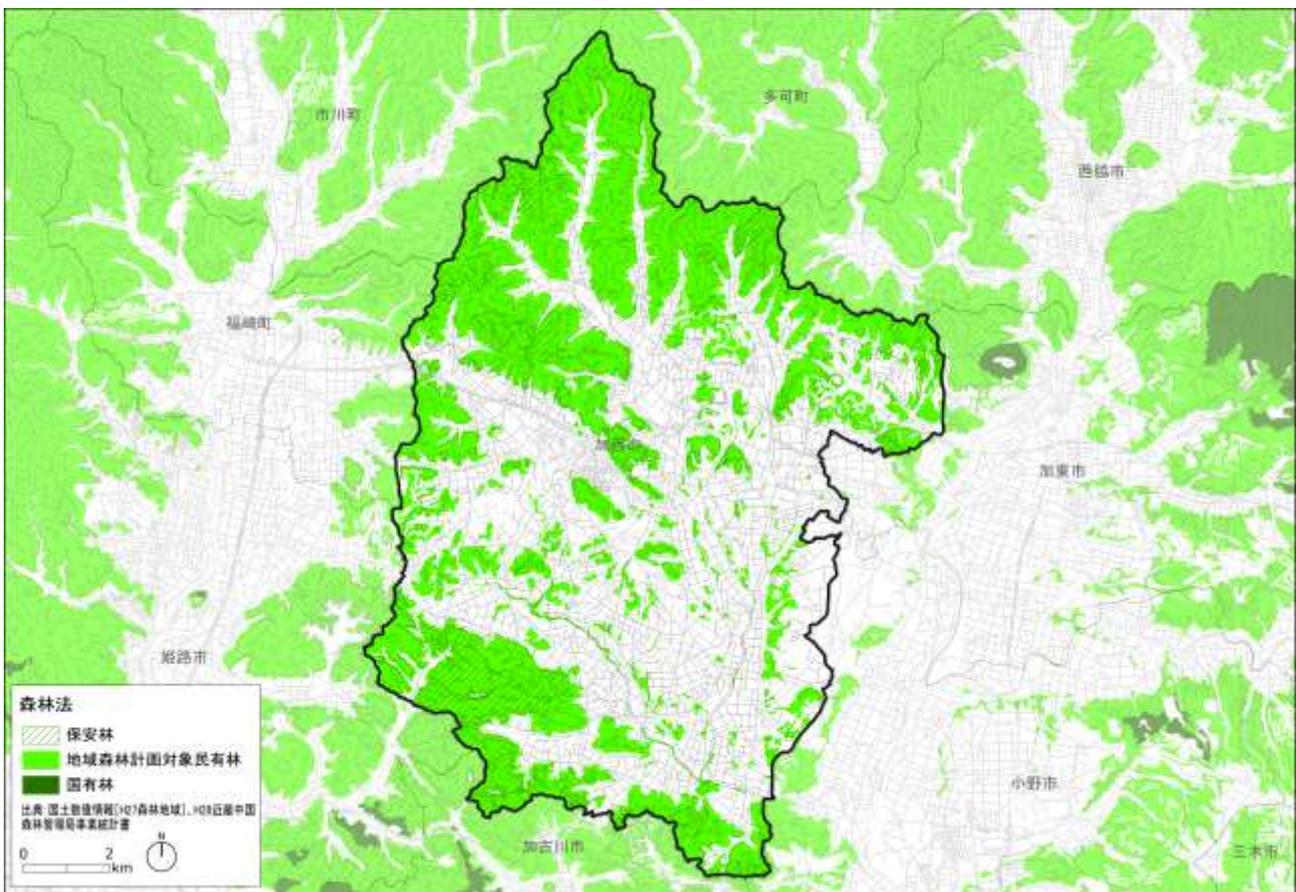


図 1-1-13 森林法に基づく区域指定

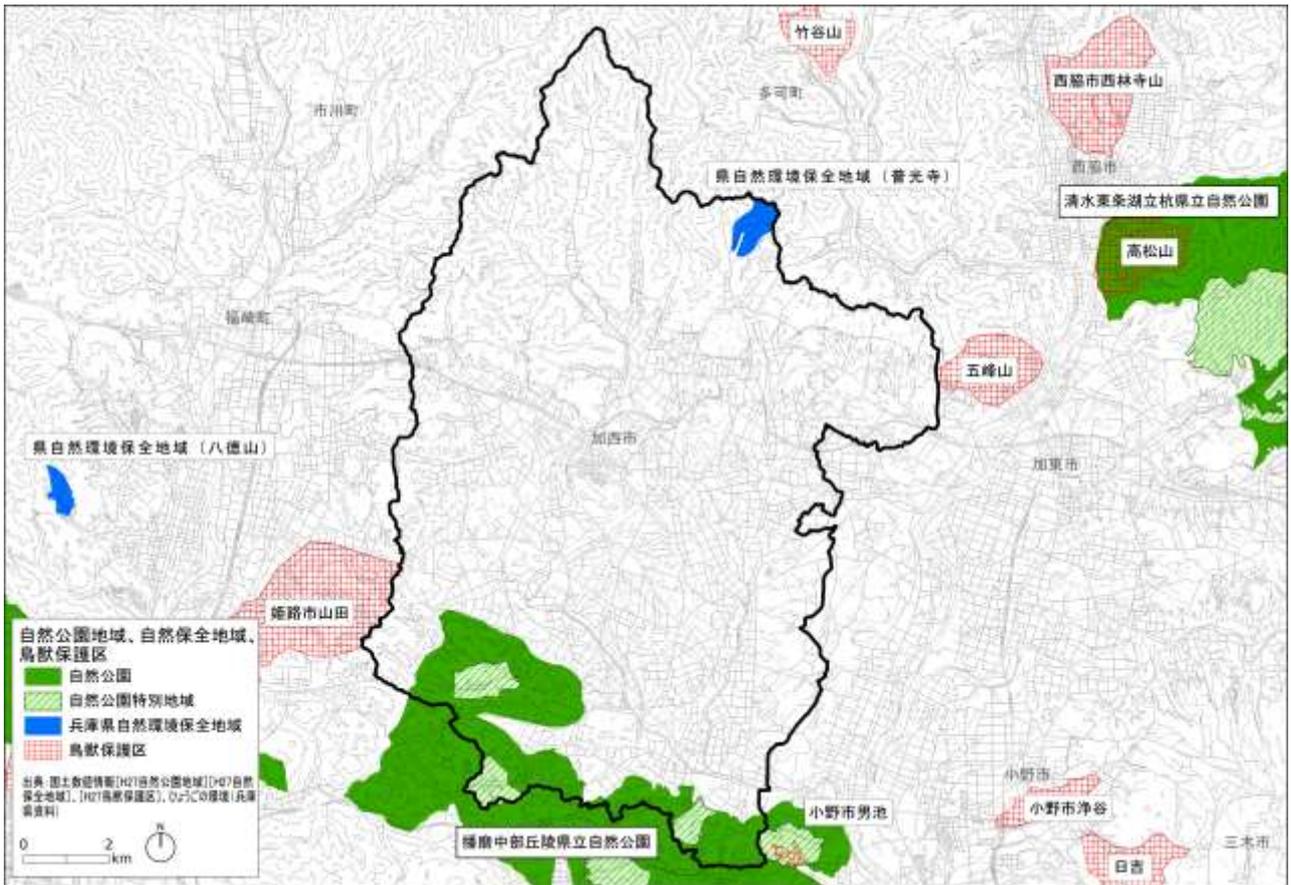
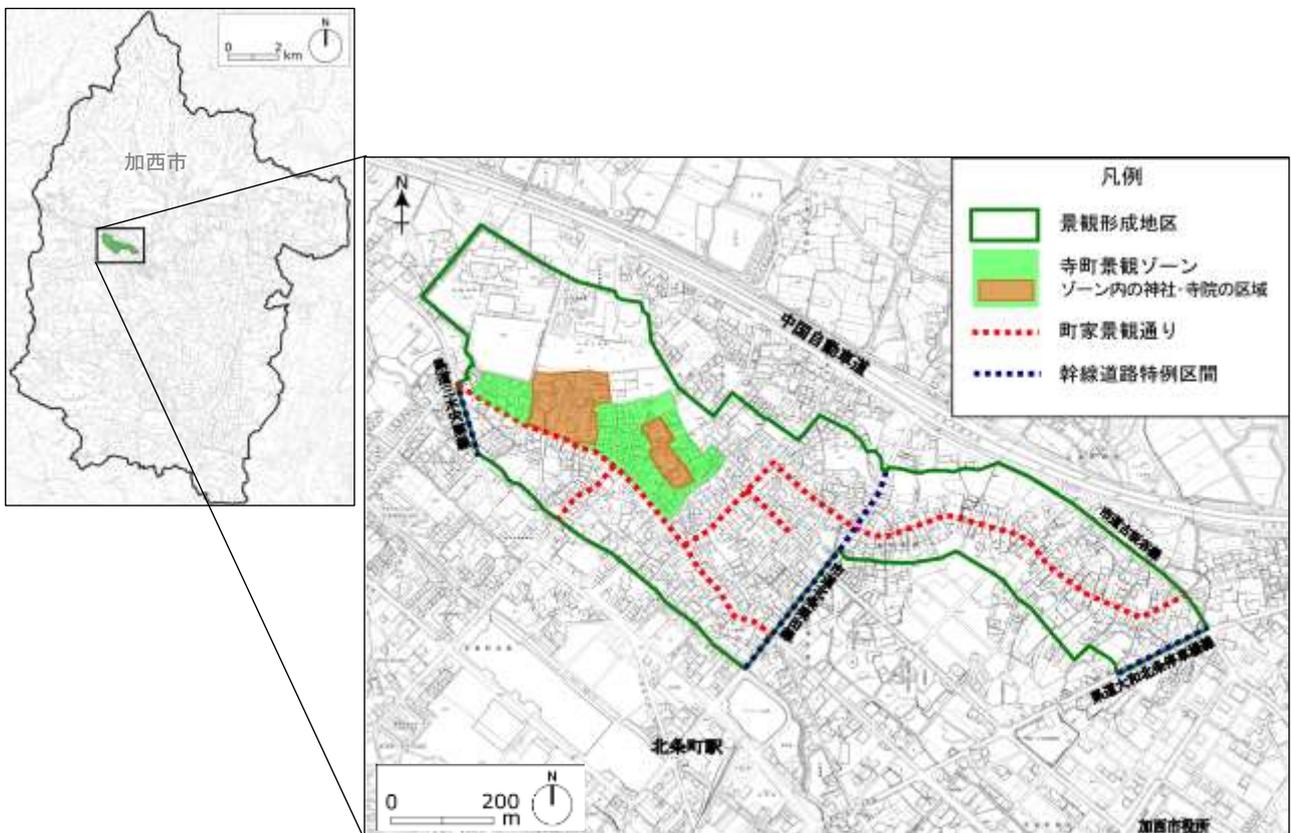


図 1-1-14 兵庫県立自然公園条例、環境の保全と創造に関する条例（兵庫県）、鳥獣保護法に基づく区域指定



(出典：加西市北条地区歴史的景観形成地区景観ガイドライン、兵庫県)

図 1-1-15 景観の形成等に関する条例（兵庫県）に基づく加西市北条地区歴史的景観形成地区の指定

1-2 自然環境

(1) 地勢

本市は、北部に中国山地東端南縁の裾野を形成する海拔300～500mの山地、西部から南部に中生代の火山活動で形成された凝灰岩類、流紋岩類を母岩とする海拔200～250mの法華山地が連なり、それらに囲まれるかたちで広い丘陵・段丘地形が続いている。市域を南流する普光寺川、万願寺川、下里川の3河川は、丘陵・段丘面を刻み沖積低地を形成しながら加古川に合流している。このような段丘面の多い地形では、環境の良い湿地が作られやすく、本市に見られる多くの生物多様性の高い湿地の基礎となっている。万願寺川の東側には広大な青野ヶ原台地が、西側には鶉野台地が広がり、播磨内陸地域最大の平坦地を形成している。この一帯は、ため池が多く、県下でも有数の密集地帯である。兵庫県ため池台帳に記載されている市域の特定ため池数は383であり、特定ため池以外のため池を含めるとその数は690となる(図1-2-1参照)。

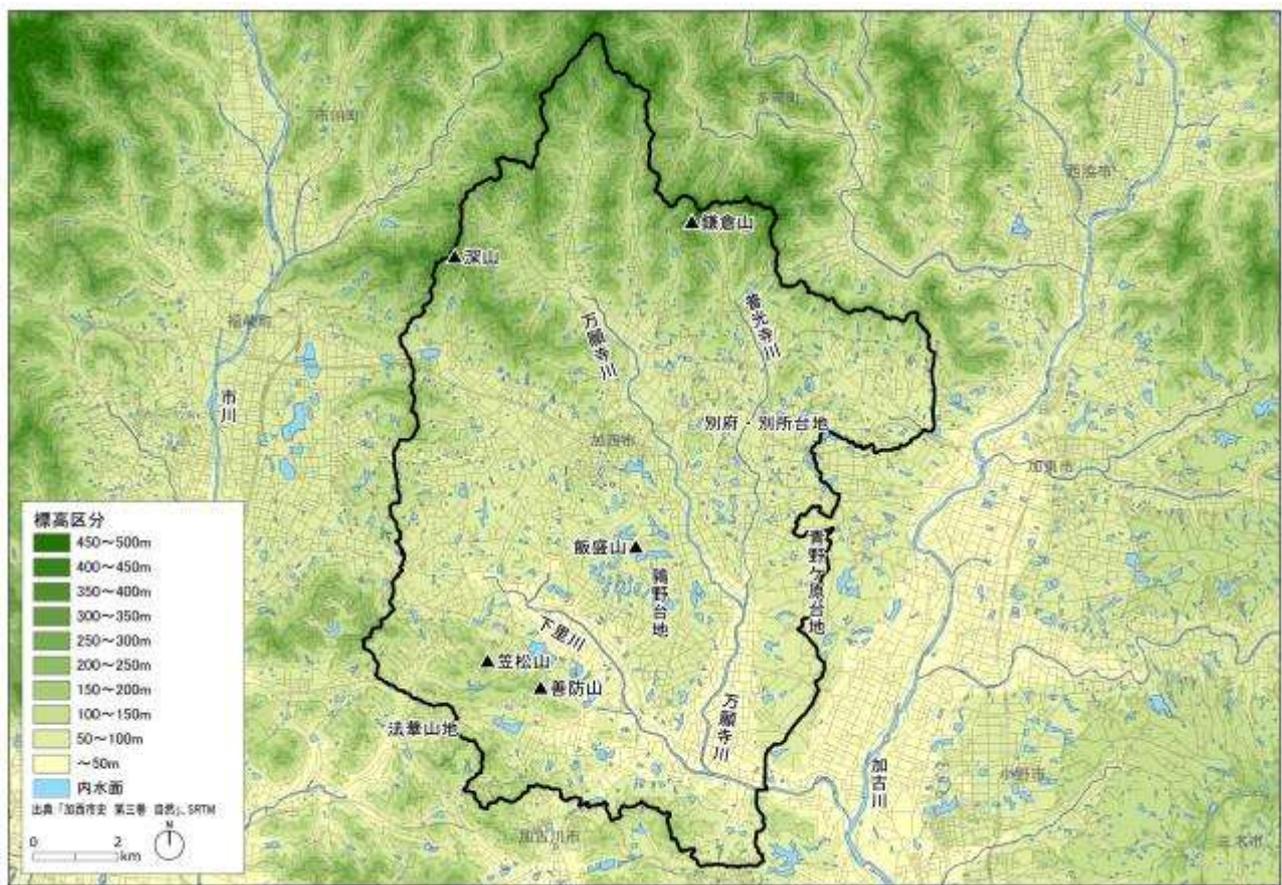


図1-2-1 地勢

(2) 地質

本市は、丹波帯、超丹波帯、上月-龍野帯の3つの地質構造帯にまたがって位置する。市域の大部分を占める丹波帯は、中生代ジュラ紀(1億9,960万年前～1億4,550万年前)に形成された付加体からなる地層群で、北は上万願寺町から南は北条町まで、西は福居町、畑町から東は国正町まで分布する。その南に断層を挟んで分布する超丹波帯は、丹波帯より古い古生代二疊紀(2億8,900万年前～2億4,700万年前)に形成された地層群で、一部に付加体の要素を持つ。市域最南端の中山町や大柳町が属す上月-龍野帯は、古生代石炭紀(3億5,920万年前～2億9,900万年前)～古生代二疊紀の地層群や岩

石から構成され、^{にしげんざかちやう ひがしげんざかちやう}西剣坂町や東剣坂町を通る断層により、超丹波層と接している。このように市域では、北から南に3つの構造体が配列し、その形成年代も北から南へと古くなっている（図1-2-2、図1-2-3参照）。

市域東部に見られる第四紀(258万8,000年前～現在)の堆積物である大阪層群は、粘土質で適度に水が溜まり、染み出すことから、段丘面の多い地形と相まって、本市のため池・湿地の多さに関係していると考えられている。

本市は、岡山県東部から兵庫県南東部にかけて分布する活断層帯である山崎断層帯に位置する。山崎断層帯は、那岐山断層帯（岡山県苫田郡鏡野町から岡山県勝田郡奈義町に至る東西方向の約32km）、山崎断層帯主部（岡山県美作市から三木市に至る西北西－東南東方向の約79km）、^{くさだにだんそう}草谷断層（三木市から加古川市に至る東北東－西南西方向の約13km）の3つの断層に区分され、本市は山崎断層帯主部の南東部に位置している。山崎断層帯主部北西部（活動周期：2千年前後）は、貞観10年（868）にマグニチュード7.1の「播磨地震」を起こしたことが知られる。一方、山崎断層帯南東部（活動周期：3千年程度）は、播磨地震よりも古い2千年前頃に最新の大地震を起こしたと推測されている。兵庫県による山崎断層



図1-2-2 兵庫県の地質構造区分の概念図
(出典：「加西市史 第三巻」)

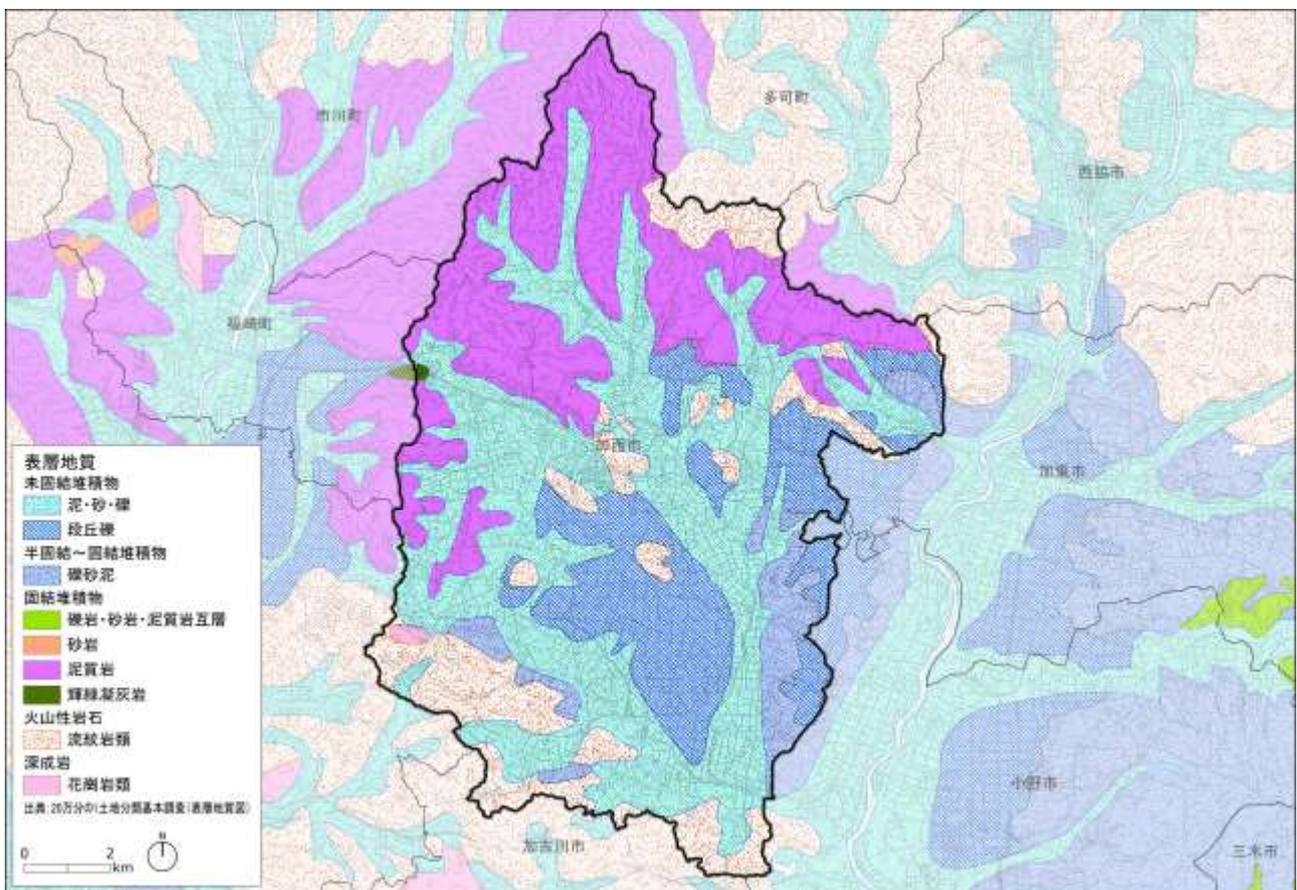


図1-2-3 表層地質

帯地震が発生した場合の本市の被害想定は、最大震度 7、建物の全・半壊数約 12,500 棟、死者約 300 人、負傷者約 1,100 人、避難者数約 12,000 人と予想されている（いずれも最大時。『平成 29 年度加西市地域防災計画（震災対策計画編）』による）。

（3）気候

本市の気候は、瀬戸内式に属し、冬期の降水量が少なく、平成 30 年までの 10 年間の平均年間総雨量は 1,455.85 mm で、平均気温は 15℃前後と温暖である（図 1-2-4 参照）。

市域では大型台風などによる被害は経験しているが、大規模水害等は発生していない。一方、天候不良による加西郡最後の飢饉が、明治 16～19 年（1883～1886）にかけて発生している。これは 16 年の^{かんぼつ}旱魃、17 年の長雨と 2 年にわたる天候不良により生じたものである。また、昭和 8 年（1933）6 月 14 日に加西郡中央部で^{こうひょう}拳大の降雹があり、建物倒壊・耕作地被害など大きな被害が発生している。

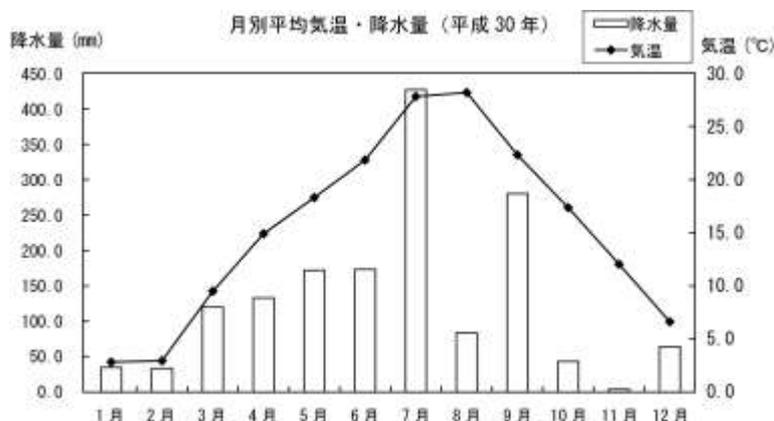


図 1-2-4 加西市の月別平均気温・降水量（平成 30 年）
（出典：「加西市統計書 平成 30 年度版」）

（4）生態系

① 植生区分（図 1-2-5 参照）

○ 自然植生

環境省による植生調査（第 6・7 回自然環境保全基礎調査）によると、自然植生として広く分布しているのはカナメモチーコジイ群集である。カナメモチーコジイ群集は、花崗岩基盤地を主とする乾性立地に成立する常緑広葉樹林であり、コジイが優占し、カナメモチ、ナナムノキ等によって区分される。この群落は、人間の影響を受ける以前、本市周辺に広く成立していたと考えられ、市内北東部の山裾には多く見られる。本市北部の^{こうちちよう}河内町の標高 240m 前後の普光寺裏山や、南部の坂本町にある法華山一乗寺のコジイ林が、貴重な群落として残されている。またアカマツ群落は、南西部の^{ふるぼっけ}古法華周辺の山地に広くみられる。度重なる伐採や山火事により本来の植生が破壊され、表土流出により岩盤が露出し、日差しが強く乾燥が激しい条件のため、アカマツをはじめとする高木の生育は悪く、疎林となっている。

河辺・湿原植生を見ると、市内には多くのため池が存在していることから、ヒルムシロクラスの浮遊植物群落（ヒシ、オニビシ、ヒルムシロ等）が発達している。その他の河辺植生としては、ヨシクラス（ヨシ、マコモ、ヒメガマ、カンガレイ等）の分布がみられる。

○ 代償植生*

代償植生としては、モチツツジーアカマツ群集や、アベマキーコナラ群集が広く分布する。モチツツジーアカマツ群集は、低地の乾性立地に成立する常緑針葉樹二次林であり、アカマツが優占し、低木層にモチツツジが出現する。この群集は市内で最も広く分布しており、北部に生育状況のよい群落が広がるが、南部はマツ枯れの被害が深刻である。アベマキーコナラ群集は、内陸部の乾燥立地に成立する落葉広葉樹林であり、土壌条件が比較的良い地点ではアベマキが優占し、尾根近くや急な斜面

ではコナラが優占する。市内の他の群集と比較すると、カキノキ、アズキナシ、アオハダ、ヤマツツジ、クリ等が高い頻度で出現することで区別される。この他、アカメガシワ-カラスザンショウ群集、クズ群集、シイ・カシ二次林などが分布する。

*人間の影響によって、立地本来の自然植生が様々な人為植生に置き代わったもの。(環境省自然環境局より)

○ その他

植林地として、スギ-ヒノキ群集が山裾や谷沿い、集落周辺などに成立しているが大規模なものは見当たらない。

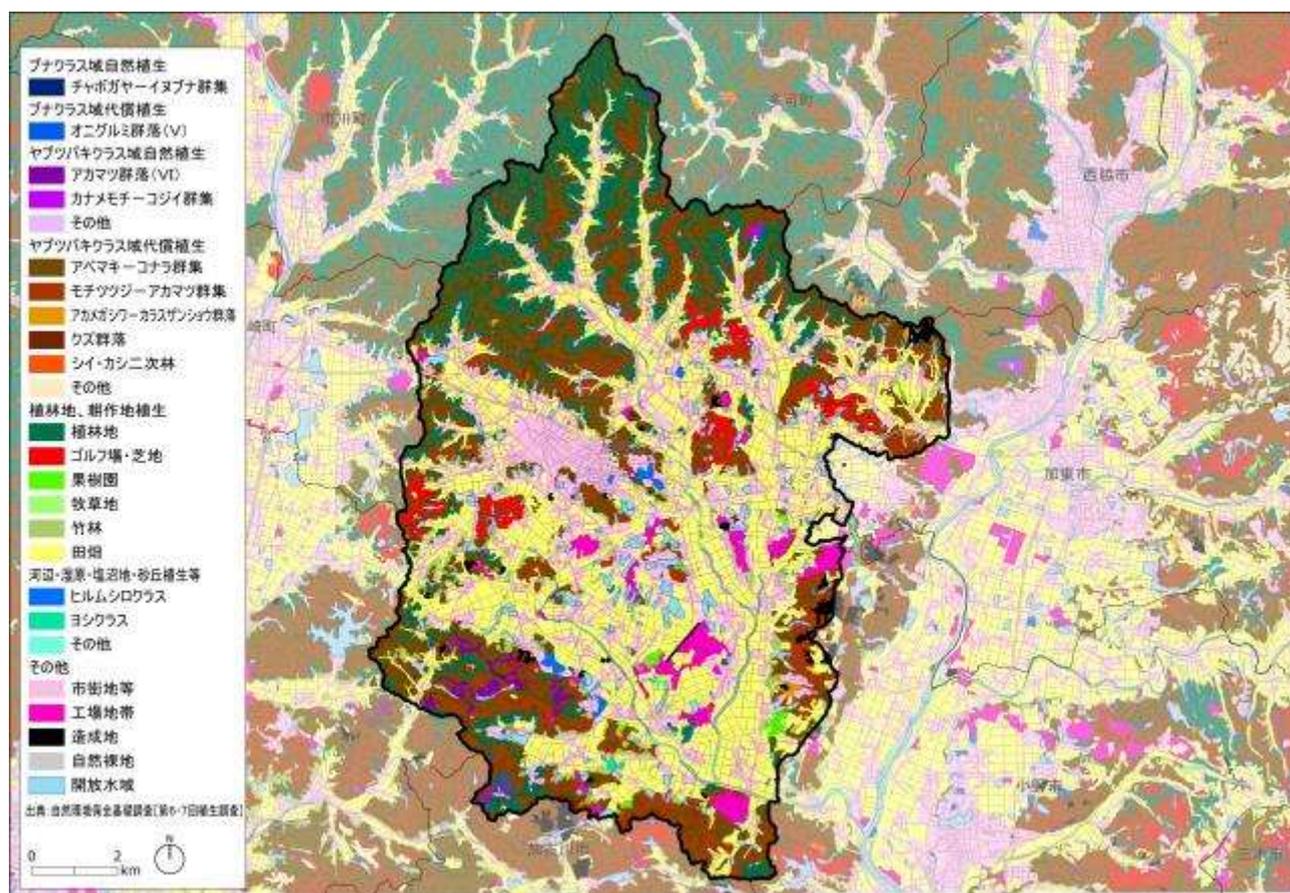


図 1-2-5 植生区分

② 重要な生態系 (図 1-2-6 参照)

本市の貴重植物群落としては、まとまった面積の自然林が残る「普光寺のコジイ-カナメモチ群集」や貴重な動植物の生息生育環境となっている「長倉池の湿地植物群落」等の 12 カ所が挙げられている。

兵庫県はため池が全国で最も多い県で、兵庫県農政環境部農林水産局農地整備課調べによると、令和元年(2019)7月1日現在、農業用ため池数は 24,400 カ所を数える。本市には 690 カ所のため池があり、維持管理にさまざまな努力がなされてきた歴史文化遺産といえる。ため池は、多くの動植物の生息・生育環境であるが、近年、ため池水面を活用した太陽光発電施設(ソーラーパネル等)の設置が増えており、ため池やその周辺の環境や風景が変化しつつある。しかし、市内のため池の各所には、他の市域では消滅した水草や湿地の植物が残っていることが確認され、環境省や兵庫県などが絶滅危惧植物としている種が、水草に限っても 26 種確認されている。



サギソウ

湿地の植物でも、サギソウ、トキソウ、イシモチソウをはじめ多数の絶滅危惧種が見られる。例えば、ミズトラノオは、他の地域では見ることが少なくなった植物であるが、本市には全国有数の規模の群落が残る。このように、本市のため池群や湿地の生物の多様性が高く評価され、「東播磨北部地域の農業用水系」並びに「網引湿原」は、「生物多様性の観点から重要度の高い湿地（日本の重要湿地）」（環境省）に選定されている。また、「網引湿原」は兵庫県の天然記念物として指定されている。ため池で繁殖する在来種のカエルの代表はモリアオガエルである。モリアオガエルは、中国自動車道より北側の多くの谷で、卵塊を見ることができる。また市内にはさまざまな様相のため池があり、それに応じて数多くの種類のトンボが生息する。例えば、チョウトンボ、ギンヤンマ、イトトンボの仲間、絶滅危惧種のベッコウトンボやナニワトンボ等の他、他の地域では消えてしまったコバムシ等、貴重な昆虫が多数残されている。しかし、こうしたため池の貴重な動植物相は、外来種により存続の危機にある。昭和 25 年（1950）以前に移入されたタイワンドジョウ、ウシガエル、アメリカザリガニ等は、在来種に壊滅的な影響は与えなかったが、昭和 55 年（1980）頃から密放流されたブラックバスやブルーギルが増加すると、それまで普通にみられたメダカ、カワバタモロコが徐々に姿を消している。



ミズトラノオ



モリアオガエル



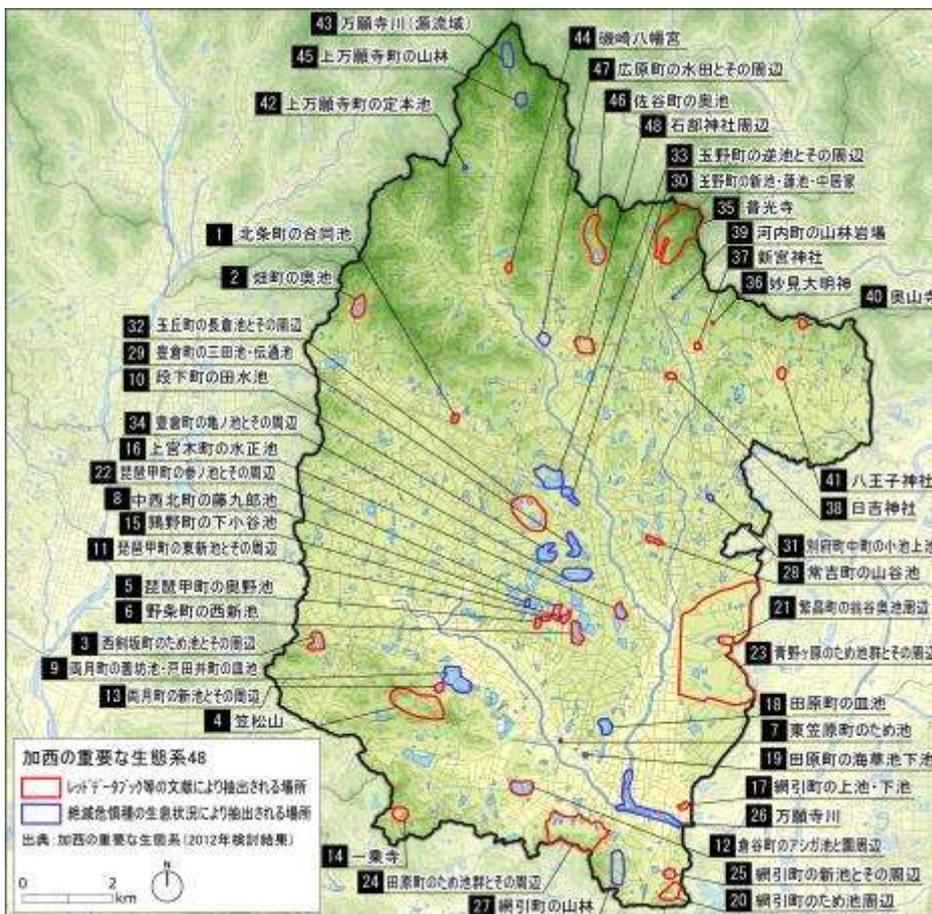
カワバタモロコ



網引湿原（県指定）
（20 網引町のため池周辺）



「普光寺のコジイカー
ナメモチ群集」
35 普光寺)



1-2-6 加西の重要な生態系

1-3 歴史・文化環境

(1) 先史（旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代）

○ 旧石器時代

旧石器時代は、石器でつくった槍などの狩猟具を用いて動物を捕獲する狩猟活動が中心であり、人々は一つの場所に定住せず、動物の群れを追って広範囲を移動したと考えられている。加西市域では、当時の状況を復元できる明確な遺跡は見られないが、さかきまいけ逆池遺跡（玉野町）やぜんぼういけ善坊池遺跡（両月町）、ひがしながもと東長本遺跡（北条町古坂）などの9つの遺跡において、後の時代の堆積物に含まれる形で、旧石器時代のナイフ形石器や尖頭器、石刃状の縦長剥片はくへんなどが出土しており、旧石器時代には、既に加西の地で狩猟活動が営まれていたことがうかがえる。その中にはサヌカイト製の石器も見られる。サヌカイトは、奈良や香川など産地が限られ、これを入手するためには広範囲の移動や交易があったと考えられている。



ナイフ形石器
(東長本遺跡出土)

○ 縄文時代

本市には15カ所⁽¹⁾の縄文時代の遺跡が確認されている。一万数千年間に及ぶ縄文時代は、土器形式によって草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6期に区分され、文化の変遷が捉えられている。

やまえだ山枝遺跡（山枝町）やしんいけの新池野散布地（繁昌町）は、草創期を中心に流行した有茎尖頭器ゆうけいせんとうきが、また、みなみうみやま南上山遺跡（中野町）では早期前半の石鏃に類似した異形部分磨製石器⁽²⁾と呼ばれる石器がみつまっている。前期から中期では、ほりやま堀山遺跡（網引町）やおかだ岡田遺跡（西谷町・谷町）などがある。堀山遺跡では、多数の礫の下から中期前葉の土器と石器が出土した土坑が検出され、墓の可能性が高いと考えられている。また、岡田遺跡では、他地域からもたらされたと考えられる工芸的に美しい装身具（けつじょうみみかざ玦状耳飾り）をはじめ、膨大な量の石器が出土し、石器製作のムラとして注目されている。後期では、ありま有馬遺跡（和泉町・山田町）、いしどう石堂遺跡（北条町東高室）、のま野間遺跡（中富町）など、晩期ではながいそ長儀遺跡（殿原町・中富町）などがある。



玦状耳飾り
(岡田遺跡出土)

○ 弥生時代

弥生時代前期には播磨地域における水田稲作が始まる。本市には45カ所⁽¹⁾の弥生時代の集落遺跡が確認されている。万願寺川左岸の低地に立地する野間遺跡（中富町）や長儀遺跡（殿原町・中富町）では前期の土器が出土し、本市の弥生文化の始点とも言える。弥生時代中期以降には万願寺川や普光寺川、下里川などの河川沿いを中心に、どこう竪穴住居跡や土壙墓、石器や弥生土器などの数多くの遺構・遺物が検出されたながつか長塚遺跡（上宮木町・豊倉町）やかきのき柿ノ木遺跡（玉野町）、もりのした森ノ下遺跡（都染町）、むらまえ村前遺跡（西上野町）などの集落遺跡がみられ、低地に集落が展開していく様子がうかがえる。また、それらの遺跡から出土する弥生土器の装飾やさまざまな道具類からは、丹波・丹後地域や播磨沿岸部、四国東部などの地域との交流をうかがい知ることができる。



竪穴住居跡群（長塚遺跡）

弥生時代の終末期になると、首長層の墓が、ムラから独立した丘の上に築かれるようになる。本市

(1) 「埋蔵文化財保護の手引き（兵庫県）」を基に計数した。

(2) 表面が磨かれたような光沢を帯び、固いものが溶けて軟らかくなったようにも見えるため、「トロトロ石器」とも呼ばれている。用途は不明であるが、祭祀に使われたとも考えられている。

では、^{しゅうへんじやま} 周遍寺山遺跡（網引町）に3基の墳丘墓が確認されている。

○ 古墳時代

本市では、古墳時代前期の古墳や集落遺跡は少ないが、中期初頭の4世紀末頃に築かれた全長109mの前方後円墳である玉丘古墳（玉丘町）の成立を一つの画期として、古墳や集落遺跡が数多く残る。この玉丘古墳には、全国でも数例しかない装飾が施された長持形石棺の一部が残ることから、首長墓であると考えられ、『播磨国風土記』（奈良時代初期編さん）では意奚（仁賢天皇）・袁奚（顕宗天皇）の二皇子との婚姻にまつわる伝承が残る根日女の墓として記述されている。玉丘古墳の周辺には、^{ささづか} 笹塚古墳（北条町古坂）、マンジュー古墳（北条町古坂）、クワンス塚古墳（玉丘町）などの中期古墳が築かれている。亀山古墳（^{かめやま} 笹倉町）は、武具類や農工具類を納めた副葬品箱がほぼ完全な形で残る点でも貴重な古墳であり、地域の首長層の墓とも考えられている。



玉丘古墳群

古墳時代後期は、横穴式石室をもつ古墳が築かれた時期であり、市内でも数多くの後期古墳が見られる。中でも^{けんざか} 剣坂古墳（東剣坂町）や^{けんざかくまのじんじや} 剣坂熊野神社古墳（同）など、古いものは西南部に偏って所在している。また、^{かもだにおつか} 鴨谷大塚古墳（鴨谷町）や^{どうやま} 堂山古墳（窪田町）は播磨全体の中でも十指に入る大規模な横穴式石室をもつため、次の時代に賀茂郡⁽³⁾の有力豪族となった氏族の墓とも考えられている。

また、^{こうづか} 皇塚古墳（上野町）は、規模は大きくないものの、在田地区を一望できる丘陵頂上に位置し、この地域一帯の首長クラスの人物の墓と考えられている。さらに、タンダ山2号墳（吸谷町・市町村）からは、^{かなぼし たがね} 鉄鉗や鑿などの鉄製鍛冶具が出土しており、この時期の本市域の金属器製作を考える上で、欠くことのできない古墳である。そして、古墳時代の終末期になると、大規模な古墳の築造が控えられ、切石による精美な横穴式石室をもつ古墳が築かれるようになる。本市の終末期古墳には、^{いしびつと} 石櫃戸古墳（西横田町）、^{ごとうやま} 後藤山古墳（倉谷町）などがある。これらの古墳の石棺の石材には、市域から産する^{たかむろいし} 高室石や^{おさいし} 長石が重用され、長持形石棺や家形石棺が多く制作された。高室石や長石は、海上交通で広い供給先を確保した高砂市の^{たつやまいし} 竜山石とは異なって、播磨内陸部に供給先が限られており、当時の石棺流通状況を物語っている。



石櫃戸古墳の横穴式石室

また、遺跡の立地は、当時の人々の土地の使い方や自然観などを現在に伝える。市域には、古墳時代から古代の集落遺跡が67カ所⁽¹⁾確認されているが、弥生時代の集落遺跡を含めて、これらの多くは重なって位置していることから、繰り返し同じ場所に集落が営まれてきたことが分かる。人々は暮らしに適した地を選択し、現在の農村景観の基礎をつくり出すとともに、そこから程近い山や丘、台地やその裾に数多くの古墳を築いてきた。また、そのような山や丘、台地の裾には、燃料の調達のしやすさ等を背景に、5世紀末頃の^{うまだにしもいけ} 馬谷下池散布地（別府町）、6世紀前葉～中葉の^{だに} ロクロ谷窯跡群（田谷町）、6世紀末～7世紀初頭頃の^{のだ} 野田窯跡群（野上町）といった須恵器の窯跡も立地している。また、『播磨国風土記』には、地域のランドマークとなる山や丘が数多く挙げられ、それにまつわる伝承が掲載されているように、先史～古代の人々にとって、山や丘は特別な意味をもっていた。このことは、^{ぬかづかやま} 糠塚山周辺への後期古墳の集中や^{めがやま} 飯盛山頂への古墳の築造、^{たつやまいし} 女鹿山古墳群など、古墳の立地からもうかがえる。そして、このような山や丘を聖地とする考えが受け継がれ、古代以降、霊場が拓か

(3) 『播磨国風土記』の記載に関連する場合のみ「賀毛」を用い、その他は「賀茂」とする。

れ、寺院が建立されるなど、山や丘は信仰の場・対象となっていた。

(2) 古代（飛鳥時代・奈良時代・平安時代）

○ 国家の形成と播磨

大和と吉備の間にあって瀬戸内海に接する播磨は、王権の形成過程で大きな役割を果たしてきた地域の一つであり、『住吉大社神代記』などによると、本市が位置する賀茂の地域も、造船用の材木の供給地として、それらの王権と深い関係をもってきた。そして、5世紀後半になり、大和への権力の集中が進められる中で、地方の豪族は中央豪族との関係を結んでさらに力を強めていった。

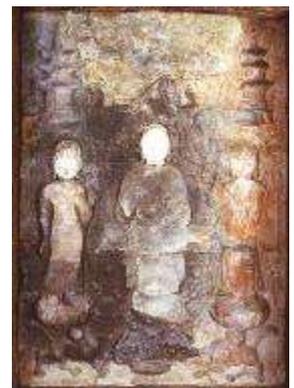
律令体制の整備が進められ、「大宝律令」の施行により、国・郡・里の地方行政組織が整えられると、本市を含む加古川中流域は賀茂郡に編成された。賀茂郡は、十二里で構成され、約1万人強の人口規模であったと推定される。



図 1-3-1 播磨国の位置

○ 古墳から寺院へ

6世紀中頃、わが国に仏教が伝わり、6世紀末に導入される。その際、播磨国に住んでいた高句麗出身の恵便が活躍したとされ、播磨国では早い段階から仏教が身近にあった可能性がある。7世紀末の白鳳期に作られ、日本最古の石仏の一つとされる古法華石仏（石造浮彫如来及両脇侍像）は、賀茂郡域における先進的で集団的な仏教文化の受容を象徴している。また、仏教が広まるなかで、地域の有力者の権威の象徴も古墳から寺院へと移行し、7世紀から8世紀にかけて、全国各地で古代寺院の造立が進む。賀茂郡には、7世紀後半から8世紀半ばまでに、殿原廃寺（殿原町）、繁昌廃寺（繁昌町）、吸谷廃寺（吸谷町）など、同郡域の小野市・加東市を含めると8カ寺が建立され、古代寺院が高密度に分布していることは、当地域の仏教受容の基盤や中央政権との関係の強さ、重要性などを物語っているとも考えられる。この他、7世紀後半には古法華山寺（西長町）、奈良時代には野条廃寺（野条町）が創建されているが、前者は山林修行の道場のごく早い例としても注目される。さらに、天平6年（734）には、賀茂郡の既多寺（所在地は殿原廃寺が有力候補）で『大智度論』が書写されている。全100巻におよぶこの経典は、「知識（信仰を同じくする集団）」として8世紀の播磨の豪族の氏姓が数多く記されている貴重な資料である。



古法華石仏



古代寺院跡から出土した軒瓦
（左：吸谷廃寺、中：繁昌廃寺、
右：殿原廃寺）

○ 古代の人々の暮らし

古代の集落は、6世紀から続くものに加え、7世紀初め頃から開発が進む中で新たに形成されたものも多くあり、8世紀にその数は40カ所を超えてピークを迎える。特に万願寺川流域に密に分布しているが、吸谷廃寺の近くの富田地区や殿原廃寺周辺の在田地区にも古代の集落があり、市域全体に人々の暮らしが展開していたことがわかる。また、朝垣遺跡（上野町）や岡田遺跡（西谷町）、三子遺

跡（都染町）などからは製塩土器も出土しており、塩の流通が播磨内陸部に及んでいる状況がうかがえる。

7世紀後半には人々の住居も、竪穴住居から掘立柱建物への移行が進んでいたとみられる。また、8世紀の集落遺跡からは、土器に文字を書いた墨書土器が出土しており、この頃には文字が村落にまで普及していたことがわかる。これらの変化は都でも同時期にみられ、中央からあまり遅れることなく、この地で文化が波及している様子がみてとれる。

このような中で編さんされた『播磨国風土記』は、現存する5つの風土記の一つである。地名起源などのさまざまな地域独自の伝承が記され、その中には農作業を行う神が登場し、農具に関連する語が数多く含まれるなど、豊作を祈り、感謝する人々の自然に対する信仰を読み取ることができる。また、古来、多くの人や物が行き交う播磨には、朝鮮半島からの渡来人も居住したことや、芸能民が都に上り、宮廷の儀礼の場に奉仕していたことなども知ることができる。

○ 中世社会への足音

10世紀頃になって律令制が崩壊する中で、受領と呼ばれる国司が直接的に地域社会を把握するようになる。播磨の場合、早くに天台別院が設けられたという9世紀以来の素地に加え、天台浄土仏教の隆盛という中央の状況がそのまま持ち込まれている。また、「播磨六カ寺（国衙六カ寺）」と呼ばれる天台宗寺院が、受領支配に大きな役割をはたした。このことは、『峯相記』で、書写山圓教寺（姫路市）、増上山随願寺（姫路市）、法華山一乗寺（加西市坂本町）、八徳山八葉寺（姫路市）、妙徳山神積寺（福崎町）、蓬萊山普光寺（加西市河内町）の六カ寺を紹介した後、「已上六カ寺は公家・武家の御願所にて、国衙の最勝王経講讚・仁王会等を勤修す」と記されており、本来は国分寺で修されるべき法会が、国分寺の衰退後には六カ寺に継承されたことから分かる。また、同書には、長寛2年（1164）に酒見社（現住吉神社と酒見寺（北条町北条））で六カ寺衆徒による大般若経読誦と論議からなる酒見講が創始されたことも記されている。



法華山一乗寺

る。

（3）中世（鎌倉時代・南北朝時代・室町時代）

○ 動乱と変革の時代

11世紀末から12世紀の院政期、院の権力に従い仕えることで、その力を蓄えていったのが平家（平清盛につながる伊勢平氏の一党）である。播磨国は、平家が拠点とした摂津国福原を支える後背地として重要な位置を与えられた。そして、平家とのつながりを持ちつつ、国衙と特別な関係を有する「播磨六カ寺」が大きな力を保持した。しかし、源平の争乱を経て平家が滅びると、平家の重要基盤の一つであった播磨国、そして本市域も大きな変動を被ることになる。公家政権と武家政権の対立や武家同士の対立など、動乱と変革が続く中世において、播磨国は都に近く、都に通ずる要衝であったが故に、中央の政争の渦に巻き込まれる。



住吉神社（旧酒見社）

鎌倉時代になると、源頼朝の命を受けて、梶原景時が播磨の軍事・警察権を握り、在地の武士を組織化していった。

播磨では西播磨に拠点を置く赤松氏が徐々に勢力を拡げ、元弘3年(1333)、赤松則村(円心)は、後醍醐天皇の倒幕の呼びかけに応じて、播磨国で挙兵する。円心は倒幕軍の一翼を担って戦功を上げ、赤松の名は知られるようになった。しかし、播磨国守護に新田義貞が任じられるなど、円心にとって満足できる恩賞を得ることができなかった。その後、円心は、建武政権と対立した足利氏に味方するようになる。建武3年(1336)、九州に敗走していた足利尊氏・直義の兄弟が勢力を回復し、湊川合戦で新田義貞・楠木正成の軍を破ると、新田氏は播磨国支配を放棄して京都に退却、赤松氏が実質的な播磨国守護となる。なお、この時、九州から陸路を進んだ直義の軍勢の一部(大将駿河守今川頼定)は、周遍寺(網引町)に陣を張っている。足利尊氏による室町幕府の成立と安定に貢献した赤松氏は、播磨を支配下に置く播磨国守護として、加西でも赤松一族やその家臣に領地や城を与えて、支配を広げていく。そして、赤松氏は、幕府の重鎮としての地位を築き、最盛期を迎えていく。



周遍寺

強大な力を持つようになった赤松氏は、嘉吉元年(1441)、折り合いが悪かった六代将軍足利義教を殺害するも、すぐに幕府方の討伐軍の細川持常・山名持豊(宗全)らに追討される(嘉吉の乱)。これにより、赤松氏はその地位を失い、播磨は山名氏の手落ちる。その後、応仁の乱を経て山名氏の力が弱まると、赤松氏は再び播磨の領国支配を回復する。しかし、かつての勢いはすでに無く、一門や家臣をまとめる力を持つことができなかった。求心力を失った赤松氏に従うものは少なく、播磨各地で赤松旧家臣や地主層から成長した地侍が台頭していく。加西でも在田氏・別府氏などが、祭礼や信仰を通じ地元民との紐帯を強めながら、基盤を強化していった。そして、これらの地域勢力が、西からの尼子氏と続く毛利氏、東からの織田信長の命を受けた羽柴秀吉という戦国時代の東西からの圧力に対応していく。

○ 顕密仏教と地域社会

動乱と変革の不安定な時代の中で、人々は心の平穏を信仰に求め、仏教が大きく浸透・展開していく。古代以来、大きな力をもった「播磨六カ寺」の一乗寺と普光寺、そして酒見寺は、寺領を広げるなど、その力を保持し続け、加西では、中世を通じて天台宗が優位を占めた。

そして、法道仙人が最初に開基した寺院として、一乗寺が核となり、中世山岳寺院と「山岳信仰(修験道)が持つネットワーク」が密接に結びつき、「法道仙人伝説」という英雄像を前面に押し出すことによって、人々の心に浸透・拡大していった。このことは、東播磨から丹波にかけての山岳地帯を中心に、法道仙人の開基と伝える寺院が数多く分布していることからもうかがうことができる。

また、顕密仏教のうち天台宗・真言宗を中心に一般民衆と関わりながら地域に根付いていったが、その一つに西国三十三所観音巡礼がある。観音巡礼を史料上で確認できる初出は、近江国園城寺(三井寺)の僧の伝記を集成した『寺門高僧記』中の「行尊伝」における「観音霊場三十三所巡礼記」と「覚忠伝」の「応保元年正月三十三所巡礼則記文」とされる。

本市では、第二十六番一乗寺が所在する。一乗寺は西国三十三所であると共に播磨西国三十三箇所三十三番、神仏霊場巡拝の道七十七番などの札所にもなり、多くの巡礼者を迎える。

「播磨六カ寺」の普光寺は、『峯相記』によれば、神亀6年(730)三月二日、官符宣を下されて、長谷寺の観音像を造立した時の第二の木切れにて十一面観音を造り、近衛大将藤原房前の御願により建立されたと伝え、現在も多くの参拝者で賑わう。

酒見寺(酒見社)では、各天台寺院から学僧が集まり「酒見講」が開催され、公開形式で行われる

仏典の「論議」や「大般若経」の転読に多数の庶民が参集した。「酒見講」は一面で学僧を育成する働きをなし、他面で庶民層を含めた幅広い階層の人々を教化し救済する役割も果たした。

また、東光寺の鬼会^{おにえ}で知られる鬼迫いの行事は、県下では、摂津から播磨、特に播磨地域に密に分布している。市域では、現在は東光寺のみで行われているが、かつては一乗寺、普光寺、奥山寺、曼茶羅寺（廃寺、畑町）でも行われていたと考えられている。鬼迫いは、もともとは12世紀初めに京都の天台宗系寺院の修正会^{しゅうしやうえ}の結願日の行事として登場する。鎌倉時代末期には京都から姿を消す一方で、主として地方の顕密系寺院の修正会の行事の中に残されてきた。播磨では鎌倉時代後期から鬼迫いが行われていたと考えられており、東光寺では、室町時代末期には田遊びとともに、鬼会が既に行われていたことが古文書に記されている。



東光寺の田遊び

さらに、古代から現代に至るまで多くの優れた石造物が遺されており、特に、中世の板碑^{いたび}が多く残っている。その中には、古墳の石棺材を利用して作られた石棺仏や石棺板碑もある。これらの板碑は有力農民を中心とした庶民層の信仰や生活の様子的一端を伝える。鎌倉期の板碑は、往時の政治背景のもとに、関東地方、とりわけ武蔵国で特徴的にみられる形式をとどめており、承久の乱後や元寇時の西遷御家人^{せいせんごけにん}とのつながりがみられる。また、板碑の種子^{しゆじ}や石仏の像容には、阿弥陀独尊^{あみだどくそん}や三尊が多く、極楽浄土への往生を説く浄土教の阿弥陀念仏の信仰が広く浸透していたことがうかがえる。この背景には、法華経を根本聖典とする天台宗系の思想のもとに、市内の多くの天台寺院で「常行三昧の阿弥陀念仏行法」^{じやうぎやうさんまい}（山の念仏）が行われてきたことが大きく影響したとされる。なお、この「山の念仏」は、酒見寺の「引声会^{いんせいえ}」として、その伝統を現在に伝える。また、念仏衆や結衆により建立された板碑や石塔は、天台浄土教の教義に基づき建立されたものであり、天台僧の介在が見えてくる。こうした天台僧の直接的な民衆との関わりは、教化だけでなく、勸進行為の一つであったと考えられている。



石棺仏（石棺蓋石）

○ 念仏信仰と惣荘（郷）のつながり

念仏信仰は地域の人々の共同の営みとして行われ、互いの現生の安穏や来世での極楽往生を願うものであった。こうした信仰を通じて、荘園や郷といった中世初期以来の地域的枠組みの中に、地縁的なつながりが強められ、近世・近代へと続く新たな自治的共同体としての村が成立していったと考えられる。そして、そのつながりの核となったのが、村の鎮守に対する信仰であった。市内の多くの町で「オトウ行事」（1年間の神社の宮守役を務める当人の新旧交代の儀式）が伝わり、河内町の「鎌倉禱^{かまくらとう}」は、鎮守の祭祀組織である宮座の中世の姿をとどめるとされる。また、中世末の混乱期には、武士勢力に対応するため、荘や郷など、村を超えた地縁集団（惣荘・惣郷）を生み出す。日吉神社（池上町）の秋大祭の「七社立会神事」（現在は六社立会）は、中世の惣荘（郷）の結合のありようを今に伝える行事とされている。



日吉神社の秋大祭

(4) 近世（安土桃山時代・江戸時代）

○ 織豊政権期の加西郡

播磨東八郡を領した三木城(三木市)主の別所^{べつしよながはる}長治は、羽柴秀吉の播磨侵攻に抵抗し、天正6年(1578)3月に三木合戦が始まった。別所氏は三木城と属城のネットワークで兵糧を確保し、長期にわたる籠城で対抗した。三木城には周辺の地侍たちが多数籠城し、加西からも、山下村の浦上^{うらがみひさまつ}久松をはじめ、多くの地侍が三木城に籠城した。しかし、秀吉による「三木の干殺し」と呼ばれる徹底した兵糧攻めにより、天正8年(1580)正月、別所氏は滅ぼされ、播磨平定がなされる。

その後、播磨国は秀吉の直轄領となり、本市域にも秀吉一族の領地などが配置されて、天下統一や朝鮮出兵などを支えた。そして、天正・文禄期の検地を通して兵農分離が進む中で、別所氏に従った地侍は刀を捨てて帰農し、庄屋など、村の有力者として近世社会を支えていく。

○ 加西の非領国型支配

慶長5年(1600)、関ヶ原の戦いにより西軍が敗北すると、池田輝政^{いけだてるまさ}が姫路城に入り、播磨国52万石を支配した。しかし、慶長18年(1613)、池田輝政が死去すると、播磨国は分割され、やがて外様大名領のほか譜代大名領・幕領が生まれ、大名の飛び地等も設定されるなど、多様な領主が所領を持つ非領国型の支配体制となっていた(図1-3-2参照)。

その中の一つに、後に「忠臣蔵」で知られる赤穂事件を起こした浅野赤穂藩がある。本市には浅野家支配当時の農政文書が散見され、その中には四十七士の一人で加西・加東の郡代を務めた吉田忠左衛門^{よしだちゆうざゑもん}の名が見えるものもある。また、歴代浅野家当主から帰依を受けて祈願所となった久学寺(上芥田町)や、小野寺十内親子の菩提寺である多聞寺(尾崎町)、奥野将監^{おくのしょうげん}が隠棲した跡と伝える場所(下道山町)など、浅野赤穂藩とのつながりを偲ばせる歴史文化遺産が数多く残っている。

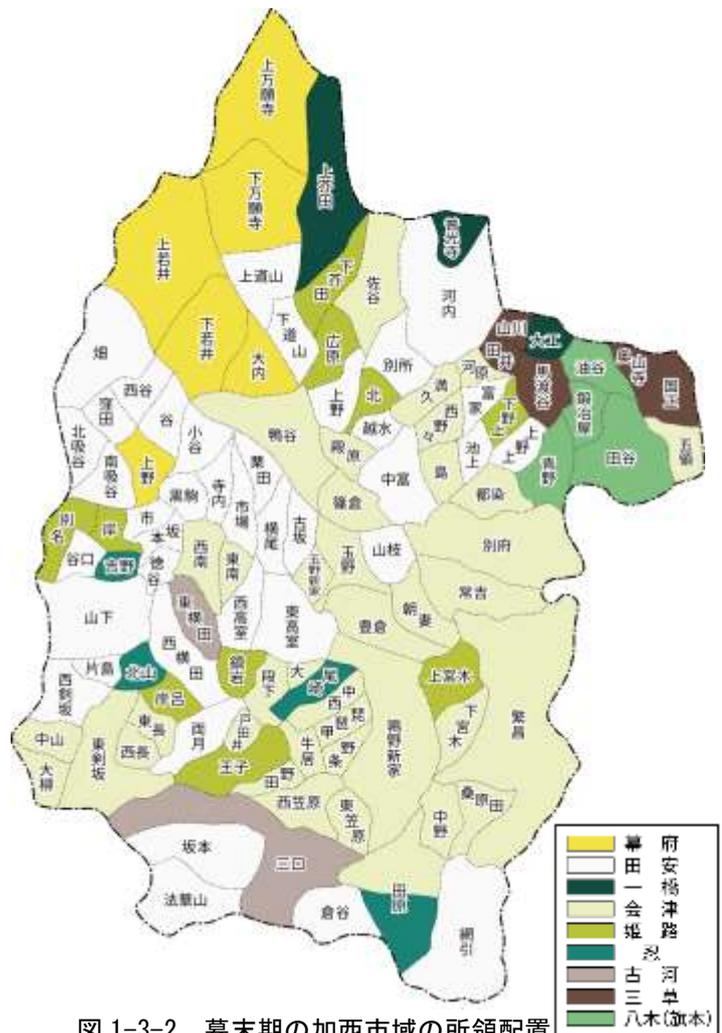


図 1-3-2 幕末期の加西市域の所領配置
(出典：『加西市史』第二巻)

非領国型の支配が続く中で、領主が異なる場合の訴訟などの広域的な支配は大坂町奉行が担当しており、地域の人々の共通の課題を解決することは容易ではなかった。そこで、播磨国の人々は、文政10年(1827)に一国単位で集会(播磨国集会)を開き、村落間の訴訟を惣代庄屋らによって解決していくことや、徘徊する宗教者・浪人を取り締まることを約束した。これを契機に、さらに具体的な問題を取り上げるため、東播五郡(多可・加東・加西・美囊・印南)集会、そして、加西一郡集会が開催され、地域を絞り込みながら、課題の解決を目指して自主的な取締り体制が形成されていった。

を得なかったためである。

また、近世の加西では、町村札や寺社札、私人札などの紙幣が数多く出され通用していた。これは、藩による強制が弱く、加古川筋を中心に多くの豪農商が存在していたためであり、姫路藩札の通用が強制された姫路藩領とは対照的である。加西の商人は、京・大坂でも展開する近隣豪商の取引網に依拠して資金を調達していった。このように、権力から保護を受けたり依存したりできない加西の人々は、そのデメリットを逆手にとって、経済活動を展開していった。

○ 知識人の活動と文学

加西には、姫路藩や小野藩のような藩校・藩学がなかったが、政治的・経済的に大坂と直接結びついていたこともあって、両藩および三草藩との関係を深めつつ、自由に京・大坂の文人と交流した。

加西の文化人の活動は、18世紀後半から19世紀初頭にかけて一つのピークを迎えた。その中心は医者こじましようぜんの児島尚善（1744～1815）であった。尚善を中心とした文化人の輪は、京・大坂との恒常的なつながりの中で、医学や漢学、和歌、俳句、絵画、茶道などと幅広く展開した。そして、その中から尾芝おしば静所せいじょや伊藤君嶺いとくんれいといった藩儒も誕生するとともに、在村文化を開花させた。

19世紀中頃から幕末にかけては、それまでの関係がさらに深まり、血縁関係も生まれて、大坂の文人墨客が北条を訪れるようになり文化が伝播された。このほか蘭方医ながたげんいの長田元意とくおかてんえんや徳岡天然、歌人の青山雄子あおやまゆうこ、俳人の高瀬帰厚たかせきこうなどが活躍している。

(5) 近代（明治時代・大正時代・昭和前期〈戦前～戦時〉）

○ 近代の地方行政

廃藩置県によって旧来の封建制度は解体され、中央集権化が進められた。明治4年（1871）の廃藩置県から明治11年（1878）まで、地方には大区小区制が敷かれ、加西市域は飾磨県第5大区となり、7小区が設定された。その後、飾磨県が廃止されて兵庫県となり、小区は3小区に整理統合されるなどの再編が続く。明治21年（1888）に市制・町村制が施行されると、加西市域は明治初年の121の自然村が1町10カ村（北条町、富田村、賀茂村、下里村、九会村、富合村、多加野村、芳田村、大和村、西在田村、在田村）の地方自治体にまとめられ、昭和30年（1955）の昭和大合併に至る。

○ 富国強兵から第一次世界大戦

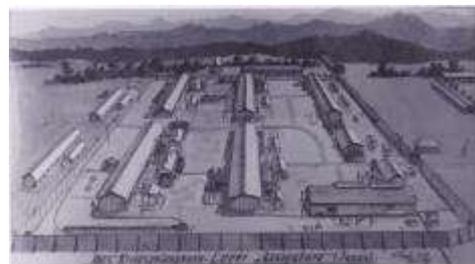
明治政府は、文明開化や地租改正、殖産興業を通じた経済力の向上（富国）と、徴兵制度や軍制改革を通じた軍備増強を図った。本市は開港場の神戸からもほど近く、政治外交上、行政上、社会上、文化上の影響は村や町の津々浦々にまで及び、徴兵制度や地租改正、近代教育の導入等が進められた。

軍備増強が図られる中で加西近郊では相次いで軍事演習が行われた。そして、特に本市域が軍事との関わりを深めたのが、明治21年（1888）の加西・加東両郡にまたがる青野原軍馬育成所の設置であった。その後、明治27年（1894）に日清戦争、明治37年（1904）に日露戦争が起こると、加西からも多くの兵士が戦地に赴いた。

一方で、米作りが主な産業であった本市では、九会・富合・下里の三カ村にまたがる平坦かつ肥沃な飯盛野いいもりの効果的な利用策を講じることが、勸業面で重要な課題であった。水利に乏しく、開墾の成果が出ない日々が続いていたが、明治30年（1897）に私立加西郡勸業会ができ、万願寺川の水を引く大規模な灌漑・疎水事業が進められることとなった。万願寺川下流域の住民の反対や日露戦争により、事業は一時停滞するも、日露戦争後の明治40年（1907）3月、飯盛野疎水が通水した。この時、中国東北部の地名を冠した奉天池ほうてんいけ、旅順池りょじゅんいけも新たに築造されているように、この事業には、日露戦争の戦勝記念事業という意味も付加された。

日清・日露の2つの戦争は、明治に入って産業化がなされてきた織物業（播州織）を大きく発展させた。外貨獲得のための輸出拡大が図られ、工場制生産が中心となり、明治38年（1905）には加西郡織物組合が創設された。郡内の生産は一層増加して、明治末頃には専業30工場に賃織物業者を加えると120工場に達している。一方で、大正天皇の即位大礼の奉祝に沸いた大正4年（1915）には、播州鉄道北条支線が開通し、大正12年（1923）に播丹鉄道北条線、昭和18年（1943）に国鉄北条線となり、昭和60年（1985）より北条鉄道となって現在に至っている。

大正3年（1914）から大正8年（1919）の第一次世界大戦では、日本は日英同盟に基づいて連合国の一員として参戦した。大戦中、交戦国であったドイツとオーストリア＝ハンガリーの兵士を収容する施設が各地に置かれるが、^{あおのがほらふりよ}青野原俘虜収容所（青野原町）もその一つであり、オーストリア＝ハンガリー兵の約8割が収容され、「箱庭ヨーロッパ」とも称されるほど、他民族の構成となった。



捕虜が描いた青野原収容所
(W. Tegge 作)

第一次世界大戦時、播州織を含む織物業界全体は、東南アジアへの輸出に沸き、綿糸・綿布相場は急騰して、戦争が終わる大正8年（1919）には最高値に達した。しかし、戦争終結とともに不況に入り、繊維業界も苦境に陥っていく。

○ 第二次世界大戦と姫路海軍航空隊基地

大正デモクラシー後、昭和恐慌、満州事変後の戦争の影響を受けて軍国主義化が進んで社会状況は反転した戦時動員体制に地域社会が組み込まれていった激動の時代であった。

昭和12年（1937）に始まる日中戦争が泥沼化するなか、日本は国民精神総動員運動、国家総動員法に次いで、大政翼賛会が結成され、戦時体制の構築が進んでいき、加西の人々もこの総動員体制に組み込まれていった。生活物資の欠乏、統制の強化は次第に産業や日常生活を窮屈にしていき、加西の中心産業であった繊維産業はもちろん、商業も衰退していった。そして、昭和16年（1941）に始まる日米戦争は、こうした窮状をさらに深めた。戦局が悪化の一途をたどるなか、人々の暮らしは、食糧増産に駆り出される女性や子どもの姿、主要物資の配給状況、文化団体も報国一色に染まるなど教育・文化の面でも戦時色が強まってくる。



姫路海軍航空隊基地庁舎
(写真提供：上谷昭夫氏)

昭和17年（1942）6月のミッドウェー作戦の失敗により、日本海軍は戦場での制空権の重要性を認識し、同年秋にパイロットを養成するため、航空兵力の増隊を決定した。昭和18年（1943）3月、姫路海軍航空隊基地（鶉野飛行場）の建設工事が始まり、地元住民や朝鮮半島からの労働者、加西郡・加東郡などから勤労奉仕団が従事し、同年10月に姫路海軍航空隊（以下、姫空という）が鶉野に開隊する。姫空は、実用訓練を行う練習部隊であり、実習教程を終えた隊員が全国の航空隊に赴任していった。昭和19年（1944）12月には、川西航空機姫路製作所鶉野工場が開設し、姫路で作られた機体運び込み、鶉野飛行場で試験飛行を行って完成した機体が海軍に引き渡されていった。このなかで、昭和20年（1945）3月には、最終検査中の紫電改のエンジンが急停止して不時着しようとした際に、国鉄北条線の線路を引っかけたことにより、列車転覆事故を引き起こし、多数の死者・負傷者を出すという事故も発生した。



北条鉄道網引駅前の
列車転覆事故解説看板

昭和 20 年（1945）2 月、戦局の悪化に伴い、川西航空機姫路製作所等の工場疎開が計画され、北条（高室）の特殊地下壕などがつくられたが、操業には至らなかったという。また、実用教程練習航空隊から特別攻撃隊が編成されることになり、姫空からも志願者が募られた。同年 3 月には、白鷺隊と名付けられた特攻隊が結成され、多くの隊員が戦地へと派遣され、帰らぬ人となった。軍事基地が置かれた鶉野は空爆の対象となり、昭和 20 年（1945）3 月と 7 月に本格的な空襲を受けた。そして、同年 8 月 15 日、ポツダム宣言を受諾して終戦を迎えることとなった。

（6）現代（昭和中～後期＜戦後＞・平成）

○ 戦後の非軍事化と基地跡地の利活用

終戦後、飛行場や軍需工場が置かれた関係から、加西には早くから占領軍が姿を見せ、兵器や弾薬が処理され、非軍事化が進められた。終戦直後の昭和 20 年（1945）8 月、政府が食糧難緩和のための緊急開拓事業実施の政令を出すと、県は青野原旧陸軍演習場と鶉野飛行場の開拓を決定し、離職する工員や復員軍人、戦災者、引揚者の帰農促進を図って入植者を募集した。青野原では約 200 人、鶉野飛行場では約 100 人が入植して開墾作業が進められたが、インフレや物価高騰、食糧不足が深刻な中での重労働であり、また、酸性の強い赤土の開墾でもあったため相当な苦勞を伴ったという。また、青野原は、開拓がようやく落ち着き始めた昭和 22 年（1947）に、占領軍により全面接收の通達が出され演習場に逆戻りし、入植者が実際に居住するまでには長い年月を要した。一方で、占領軍の指揮下で政府により進められた農地改革は加西にもっとも大きな影響を及ぼし、自作農地の比率を飛躍的に増大させていった。さらに、戦時体制から平時体制への移行は、産業の非軍事化を進め、繊維産業の復活や三洋電機の創設は、加西の復興を端的に示すものであった。

姫空基地の滑走路を含む一部はアメリカ軍に接收されたり、昭和 27 年（1952）4 月には警察予備隊（自衛隊の前身）が旧航空隊兵舎に進駐した。昭和 32 年（1957）9 月には、接收も解除され、滑走路は大蔵省の管轄となり、昭和 37 年（1962）には、農林省・防衛庁に引き渡された。昭和 41 年（1966）には、県立兵庫農科大学の神戸大学移管に伴い、一部の土地で農場（現神戸大学食資源教育研究センター）の建設工事が着手された。当時、敷地内には建物基礎、防空壕などが散在していたが、これらの頑強なコンクリート構造物は、工事予算の都合上完全に撤去できず、一部はそのまま残っている。残りの土地についても、その利用に関してさまざまな議論が続いた。地元住民は完全なる払い下げを希望し、他方では播磨空港として活用すべきという意見も相次いだ。結局、空港としての活用の話は立ち消えとなった。



鶉野飛行場跡

平成 19 年（2007）には、防衛省に対して払い下げ要望をあげ、払い下げに向けた調整が進められた。そして、平成 28 年（2016）には、払い下げの手続きが完了し、本市では、観光・平和学習や防災の拠点、地域住民の憩いの場としての整備を進めている。

○ 昭和の大合併と加西市の誕生

昭和 30 年（1955）前後に全国的に進められた昭和の大合併の中で、1 町 10 村があった加西郡においても合併がすすめられた。昭和 29 年（1954）には、芳田村が西脇市、大和村が八千代町（現多可町）に合併した後、昭和 30 年（1955）には、現在の加西市域を構成する 1 町 8 村がそれぞれ合併して、北条町、加西町、泉町の 3 町が成立した。

町村合併が進んで 3 町体制となった後も、さらに 3 町合併の機運が盛り上がり、昭和 38 年（1963）

には、加西郡広域行政調査特別委員会が発足し、市名や庁舎位置などのさまざまな協議・調整を経て、昭和42年（1967）に現在の加西市が発足した。

○ 市制施行後の加西

加西市が発足した昭和40年代前半、日本はまさに高度経済成長の真っただ中にあり、日本中が都市化、近代化、工業化へと突き進んだ時代であった。昭和44年（1969）3月の「加西市総合開発基本計画」（第1次）では、加西市の位置づけを「西日本経済を支える阪神工業地帯と今後飛躍的な発展を遂げるであろう播磨臨海工業地帯の後背地としての内陸工業化と、これらの発展に伴い住宅、或いは観光レクリエーション地帯としての位置と条件を具備している」と捉えて、地域の総合的な開発と産業の振興が目指された。そして、このような考え方のもとに、^{こうじや}糺屋ダム（多可町）の建設への参画や加西ハイツの大規模開発とその中心への加西病院の建設、中国縦貫自動車道の開通といった市の基盤が形成・整備されていった。

昭和52年（1977）3月に策定された「加西市総合計画」（第2次）では、それまでの開発が必ずしも相互に総合的でなかったことを反省して、全市的な土地利用の秩序を形成すること、そして将来像を「緑豊かな田園文化都市」と位置づけ自立性が高く、環境の良い住み良い都市づくりを進めることを目指した。県が推進する「緑の回廊づくり」のもとに昭和50年（1975）には、「緑の自然歩道 加西市コース」が決定され、昭和51年（1976）には、「兵庫県立フラワーセンター」、「いこいの村はりま」がオープンされるなど、開発一辺倒ではない加西の個性づくりが進められた。



兵庫県立フラワーセンター
（出典：兵庫県立フラワーセンターホームページ）

一方で、自家用車の普及やバス路線の充実等を背景に、昭和40年代から廃線の危機にあった国鉄北条線は、運輸省・国鉄への陳情や廃止反対運動等が展開するも、昭和57年度末までに廃止されることが決定した。廃止期限が迫る昭和57年（1982）になると、存続運動側に変化がみられ、国鉄に固執せず、柔軟かつ現実的な対処で鉄軌道を存続して市民の足を確保しようと、第三セクターの気運が高まる。そして、昭和59年（1984）には、県・沿線各市・民間企業等



北条鉄道

でつくる第三セクターによる新会社がレールバスを運行する形で存続することが決定、昭和60年（1985）3月31日に国鉄北条線は最後の日を迎え、翌4月1日から新生北条鉄道が営業を開始した。

昭和61年（1986）6月に策定された「加西市総合計画」（第3次）では、「花と緑にまつまれた人間交流都市ーかさい」を目標として、12の重点プロジェクトを掲げた。そして、同計画に基づいて、中国道加西インターチェンジの着工や市庁舎の整備、米国プルマン市と友好都市提携協定の締結、北条町駅周辺地区の市街地再開発、新規工業団地の開発など、さらには、平成7年（1995）には、建設省から「歴史街道モデル」事業計画策定地区の指定を受けて、市内の歴史文化遺産を活かしたまちづくりを目指すための「街道計画整備プラン」を策定して、町並みや交通網、公園などの整備を進めてきた。平成7年度から平成12年度に玉丘史跡公園整備事業を実施して、平成13年（2001）に玉丘史跡公園を開園し、地域の憩いや観光・交流、学習等の拠点となっている。

さらに、「加西C I宣言」に基づき、キャッチフレーズ「花・ゆめ・根日女」と、市のキャラクターマークを定めて、市の統一イメージを



加西市キャラクターマーク

打ち出し、地元製品の売り出しや各種イベントの開催などの情報発信を積極的に行ってきた。

その後も、平成 13 年（2001）3 月策定の「加西市総合計画」（第 4 次）や、現行の平成 23 年（2011）9 月策定の「第 5 次加西市総合計画」に基づき、人や健康、産業、暮らし、環境などを視点としながら、豊かな生活環境づくりや地域の活性化、産業や観光の振興などに向けてさまざまな取り組みを展開している。特に近年では、「健幸都市加西」を目指した「加西市歩くまちづくり条例」の制定、若者の定住促進による地域活性化や人口増に向けた「加西市若者主役計画」の策定、気球の飛ぶまち加西の定着に向けた「気球の飛ぶまち加西条例」の制定などにみられるような、個性豊かな取り組みも展開している。



気球の飛ぶまち加西

また、歴史文化の面では、歴史ウォークや「加西市播磨国風土記 1300 年祭」などのさまざまなイベントの継続的な開催、加西能やこども狂言などの新たな歴史文化の創出などの魅力づくりに取り組むと同時に、平成 29 年（2017）には、^{せんごく}千石コレクションを展示した古代鏡展示館（兵庫県立考古博物館加西分館）が開館され、新たな歴史文化の拠点としての活用を進めている。



平成 30 年（2018）には、移住・定住や交流人口の増加に向けた取り組みをより着実に推進すべく、「きてみて住んで課」が新設された。同課では、平成 28 年度（2016）に策定した「シティプロモーションビジョン」を基にロゴマークの作成をはじめとした加西市のブランド化を進めている。



古代鏡展示館

（出典：兵庫県立考古博物館加西分館
ホームページ）

観光の側面では、「第 2 次加西市観光推進基本計画」が平成 30 年（2018）3 月に策定され、「鶉野飛行場跡地の活用」、「北条鉄道の活用」「フラワーツーリズムの推進」、「加西名産の開発および PR」、「体験型プログラムの充実」の 5 点を重点プログラムと位置づけ、観光振興を進めている。

また、「加西市ふるさと創造条例」（平成 25 年施行）に基づき住民主体・連携によるまちづくりを進めるため、平成 25 年（2013）より、小学校区単位を基本とし、地域住民主体のまちづくり組織の立ち上げを進め、平成 30 年（2018）3 月に 11 の小学校区全てでまちづくり組織「ふるさと創造会議」が組織された。現在は、それぞれの地域の課題にあった活動や、地域の特色を生かした活動を展開している。

さらに、令和 2 年（2020）には、「加西市ふるさと創造条例」を全面改正した「加西市協創のまちづくり条例」が施行され、これまでの「参画と協働」によるまちづくりを踏襲しつつ、外部の人材やノウハウを誘引するため「情報発信」を強化することで、関係市民を含めた多様な主体による地域課題の解決や新たなまちの魅力の創出を目指している。